

聖人賢人言行錄

## 序文（一）

天下に道あれば治まり、天下に道なければ乱れるとあり、治乱興亡のすべてのキーポイント（鍵）は道の一字にある。古人も「道は近きに在りて、遠きに在らず、道は内に在りて、外に在らず」と述べており、この道を治めるとは、心を治めることに外ならず、この心こそが木の根であり、水の源であり、また世界平和への大本でもある。そこで聖人、賢人言行録は、心を治め身を修めるところの必読の書である。

顧みるのに、道院、紅卍字会が設立以来、八十余年になるが、その間に聖人、賢人の残された珠玉の教えは、枚挙にいとまがないのである。

王瀾観会長が、其の中より約九十九ヶ条を抜粋して、単行本として出され、それを根本誠乾氏が平易な日本語に翻訳して、ここに出版することになり、古人の言に「一燈を提げて暗夜を行く、暗夜を憂うこと勿<sup>な</sup>れ、ただ一燈を頼め」とあり、願わくはこの書物を暗夜を照らす修道の一燈とし、皆さまのご参考に供する次第である。

陳福坡

## 序文(二)

聖人・神人・仙人・仏がこの混濁こんだくの世にその靈を降くだされ、道を以てつとめ修め、慈を以て励み行うように、数十年來の訓文で説き示された教えは、あまりにも多すぎてこれをいちいち記述することはできないのである。

これらの訓文はすべて身を修める人の身心性命の学問であり、後天的に習い染つたよくない氣質を変化させ、功德を修め、過失を省みて、言行が一致しているか否か、後天的に染つた悪い習慣を打破し、俗世間に引きづられて、天理と私欲、道義と利欲、眞実と迷いの区別が全くつかず、そこで訓文では時機にしたがつてその迷いを指摘し、縁にしたがつて導ききと覺らせ、懇切丁寧に解釈され、これによつて多くの人が迷いから醒めて、清静の境地に登り、時々刻々に移り変わる一時の幻の境地を脱却して永遠の眞実に返り、己を度すくい人を度い世の中を淨化するののである。これら聖人、哲人、神人、仏等の呼びかけに對し、一体幾人が目を醒し、幾人が覺さつたであろうか。又たとえ自ら悟り自ら恥じていても誰が知っているであろうか。

ましてや見ていながら見過して気がつかず、聞いていながら聞きながして気がつかず、時は一瞬の間に過ぎ去って過去となり、聖人、賢人の本は書棚に積まれて全くかえりみられず、ときたま昔読んだ聖賢の書を想い起こしてひもどいて見ようとしても、その年月日がわからず、調べることもできないのである。いま各人が内に潜ひそんで心を修めることを助けるために、修行の過程に於ける教えの神髄について、要点を抜粋してこれを座右の銘とし、戒心恐懼かいしんきょうく（恐れ戒め慎むこと）し、以て修行のたすけとするのである。

ここに要点を抜粋して九十九ヶ条を挙げたが、すべての修人が九十九ヶ条の中から、たとえ一ヶ条でも又数ヶ条でも切実に身に対して、これを行うことができれば、また以て徳性を啓発し、身を以て修めその先天の固有の性靈を保つことができるのである。

一九七二年三月吉日

王瀾観

(一) 自らを恕ゆるす（自分に対して寛大である）ことは自らを欺あざむくことに等しい

のである。そこで君子が自らを恕さない（自分に対して嚴格である）とは自らを欺くことになるのを恐れるからである。罪の最大のものは自分の良心を冥くまし、欺くことである。又禍わざわいの最大なものはその心が死ぬことである（良心が麻痺して、心が頑冥固陋がんめいころうの状態）（註）。自分が人をだまし欺あざむこうとすれば、まず自分の心を冥くまし、自分がその神（精・氣・神）をだまし欺あざむこうとすれば、まず自らその心中の神しんを蔽おほい隠すのである。世俗の人はただ有形の生死だけを知って、無形の心の生死を知らないのである。思うに心の生死というのは、無形にしてこれを知ることはは難むづかしいけれども、しかし言葉や行動に表れるところ、その足跡をとどめていて、誰にでもわかりやすいのである。

（註）莊子に「仲尼ちゆうに（孔子）が曰うには、悪いぞ察しやくせざるべけんや、それ哀あはしみは心の死より大なるはなくして、人の死は亦これに次ぐ」とある。孔子が謂いわれるには、どうしても物事ものごとの本質を詳細に観察しないでいられようか、どうしても物事ものごとの第一義の意味を観察しなければならぬのである。そこで最大の哀あはしみは無形の心の死である。有形に於ける人の死はこれに次ぐものである。

## 自ら欺くとは大学に

「いわゆる意を誠にするとは、自ら欺くことなきなり」その意念を誠にしようとするれば、自分自身の心を欺かないことである。そこで古人はこの欺くという字を妄と解釈している。心中の妄念妄想や妄心は、みな自らの心を欺くことになるのである。邪を閑ぎて誠を存す」とは、とりもなおさずこの意味である。

(二) 身を以て世に対処し、又人生の各方面の道理に於て、聰明な人は多くのことが理解できるのである。しかしこれを身近に実行することになると、多く理解するよりは多く実行することにこしたことはないのである。少ししか理解できなくても、真実を以て行なえば、そのときそのときに於てみな成果があるので、これらのことは才能や名誉・地位に関係がないのである。ただ真心を以て実行することを重んじるだけである。信願をそなえていて、たとえ逆境にあつても変らず、誠実にして慎み深いのは、徳に篤い人である。

(三) その人の長所を知れば、自分ではその足りないところを自覚し、自己の短所や欠点を反省しなければならぬ。逆に他人の欠点や誤りを見れば、同時に自分にも同様の欠点や短所や過失があるかどうかを省みるのである。善を知ってはこれにしたがい、不善をみてはこれを改めるといふことは、本来空理空論ではないのである。たとえ自尊心が強い人であっても、又人の振りを見て我が振りをなおすのである。又他人の忠告や警告にも虚心にこれを受け入れなければならず、これによつて各個人の欠点や弱点を補うことができるのである。

(四) 天地には私心がなく、聖人や仏には靈魂れいこんがある。上帝(天にある神)に対し福を賜るよう祈つたり、或は苦しい時の神頼みで、神にすがり求めることはすべて無益であつて、迷信に陥おちいるものである。そこでただ善念を存し(悪念を起さない)、善い事を行い(悪い事を行わない)、善い縁を広め、良い書を読み(悪い書は読まない)、良い事を話し(悪い事を話さない)、このようにして良い人になりさえすれば、たとえ不運不幸なことにめぐり合つても、それを幸せや吉祥に

変えることができ、禍を転じて福となすことができるのである。そこで聖人や仏の恩恵や徳行というものは、一般の人民が不幸や災難に出合ったときに逃避したり、一時的に禍から免れるように、要領よく立ち回ることを教えるものではなくて、よく心を修めることによってこの難関を克服するのである。

又聖人や仏は別に絶対安全で少しも危険がないと人に約束するのではなく、これらの危険を招くところの根源は、すべてが各人の心にあるのである。そこで善男善女を手引きして心を修め、安らかに彼岸（極楽浄土）に達するように導いてくれるのである。各人が心を修める上で、果して上帝の意志に帰依し、随順してこれに違ふことがないかどうかを常に反省すれば、上帝の大慈大悲の心を身に体得して行うことができるのである。

(五) 人生に於て苦しみや、困難や恥辱を受けることは、別に憂いとすることはないのであり、これらを招いたところの原因こそが、最大の憂いとするところである（ここで言う、恥辱を受けるとはその結果であり、問題はその結果ではなく

てその結果を招いた原因こそが、最も大事であることを指摘している)、**名利**(えいりきみょうり)によって栄達を受ける)とは決して楽しみではなく、**名利**を忘れることこそが**楽しみ**である(一般の人は**名利**を得て**名利**にとらわれ、これに執着して不幸になるので、逆にこれを忘れることによって**楽しみ**となるのである)。そこで君子は、**貧困**にもまた**楽しみ**(**貧困**のときには**貧困**を**楽しむ**)、**万事**順調な時もまた**楽しむ**のであり、その**楽しむ**ところは、**困窮**と**栄達**によって左右されるものではないのである。

(六) 人から**非難**されると**怒り易**くなり、そこで**怒れば怨恨**(えんこん)(**恨み辛み**)が生じる。人から**誉められれば喜び易**く、**傲慢**(ごうまん)になって**自ら驕る**(せう)ことになる。これが**普通の人の共通の病**である。これらはすべて**修養**の何たるかを知らないことに起因する。故に日に日に自分の**思うがままに振る舞**って、**少しも覚らない**(さと)のである。君子はこれに**反し誉られればこれを恥**と思ひ、**恥ずれば恥じるほど謙虚**となつて、**内心に向つてこれを修める**ことになる。人から**非難**されれば、**自らを反省**(いんまじ)し、**戒**

め、自らを戒めれば懼れ慎むようになるのである。そこで修養の工夫というものがあれば、人から非難されても恐れることなく、人から誉められても喜ぶことなく、これらによつて心を動かすことがないだけではなく、これらを心を磨くとこの砥石として、錬磨し修行のたすけとするのである。

(七) 幸福な運命を得ようとすれば、その幸福をもたらず種子を植え、培わなければならぬ。幸福の果報を得ようとすれば、先ず幸福の原因や種子を植えるのである。徳というのは善の成果であり、福は徳の産物である。そこで福德は互いにたより合ひ、福善は互いに一つの根から出てきた産物であることがわかるのである (註)

善とは道心に帰ることであり、福とは天命を奉じた結果得られるものである。

(八) 道心のないものには、真の慈善を行うことはできないし、慈の心のないものもまた真の道を成就させることはできないのである (註)

(註) 道とはいまだ現われない前の慈であり、慈とは已すでにあらわれた後の道である。このように道と慈は一如いちじよである。

(九) 君子は決して外に向つて願ひ求める心はなく、ただ内に向つて根本こんぽんの所在(心の所在)をよく養ふない培うことを願うのである。慈善じぜんの種子たねを広くまけば、その收穫を求めようとしくなくても自然にその收穫は得られるのである。又たとえ平安を求めなくても、平安の種子たねをまいておけば、その平安は自然に得られるのである。その平安の種子たねをまかないで、どうして平安の果実を得ることができようか。ことわざにも「善根を積み重ねて行けば、必ず吉祥を招くことができる」、徳の種子たねを植えれば、必ず福の果実を得ることができると言っている。これがどうして偽りいつわであろうか。これこそが人生の眞実である。

(十) 和は祥(さいわい)を招き、徳は福を招く、これは通常の道理であり、これは過去に於てもこれを実証することができし、今後に於ても信じていることが

きるのである。自らの心霊の秤は、自らこれを点検することは比較的容易である。善を起こし苦を救うのも、自らの一念にほかならないのであり、それはいつてもどこでも、誰でも臨機応変にしたがつて、修道の願望を実現することができるのである。未だ来ないものはあらかじめ予測することはできなくても、心中の福田（心の中にある福の種子を植える田地）は、善縁が集まるところであり、この心中の福田は自分の一存によつてすべて決定できるのである。そこで心中の福田に種子を植えることをゆるがせにしてはならないのである。修道はすべてが自らの一心に外ならず、禍福の機もまたこの自らの一心に外ならないのである。

（十一）身を修め、心を修めるには誠を以て根本とする。誠とは私心がないことによつて現われ、そこで少しでも私心があれば、誠ではないのである。若し誠がなければ自分自身の心さえも度うことはできないのである。

（十二）道を修め慈を展めるには、全力を傾けてこれをなし、更になお時時刻刻

これを戒しめ、おそれ慎み一念一念の間に、道と慈に相反する理念があるかどうかを省みるべきである。また人に施し与えるのに果して報いを期待するような考えがあるかないか、又功德を施してもそこに矜の気持があるかないか、もしそれらがあれば軽微なうちにこれらを取り除いて化してしまふのである。これによつてその心が一誠不二（誠一すじにして、不純な念を起さない）となることを心ざすのである。

（十三）汚れ濁つたこの世の中に於て修道するには、まず自分の心をしっかりと修めなければならぬ。それには内在の主宰である心が、外来の影響によつて動かされるようなことがあつてはならないのである。たとえ人が自分を誉め称えても喜ぶことなく、又人が自分を辱かしても怒ることがないようにするのである。このように人から誉められたり、辱かされたりしても一喜一憂して喜こんだり怒つたりするのは、全く自分自身の主宰を失つて、他人によつて振り回されているのにひとしいのである。すべては自分の内在の自覚した本心によるのであり、

自らの内にあつて生成発展して、極まることのない大我（註一）をおろそかにしてはならず、又心中にあるところの上帝（神）（註二）をくらましてはならないのである。

（註一）大我とは小我と対比される。小我とは一般に言うところの、肉体を備えている小さな我自身であり、大我とは自分自身を超越した真の我である。言うところの「自分でない自分」である。それは仏教で言う不生不滅にあたり、又永遠不滅の実在でもある。

（註二）上帝は各人の心の中にある。

（十四）修行を持続していく上での要点は、人が誰も知らないで、自分独りだけが知っているところ（各人の心中の世界）に於て、真剣に道を修める者は必ず時刻刻に自らの一念が道心であるか人心であるか、天理であるか人欲であるかを自ら反省し、又天理か人欲か、道心か人心かを厳しく見極め、また是非善悪をはつきり区別し、たとえ一時一刻たりともこれらをゆるがせにすることはできない

のである。自分で自らの心靈を審らかにし、自らの過失を改め悟り、日々これを温め養い、これを長期にわたって持続して行けば、物欲はだんだんと少なくなり、消滅して本来の光明正大なる智慧がだんだんと明らかになり、このようにして修行が日に日に進むようになるのである。

(十五) 災劫が類発しこれを救済するとき、赤心を振るい起して勇んで救済に赴くべきである。それは他人がこれを自覚していると否とにかかわらず、ただ自身自身の内心の自覚を求めただけである。又他人の功行がどうかあるかを問わず、ただ自分自身の功行に励むだけである。他人が自分に対してどうかあるかを問わず、ただ自分が能く道慈を明らかにし、功行に励むことだけを求めるのである。我が天職を尽し、我が慈悲の心を宏めるのは、すべて一切は心に頼るのであり、わずかも功罪にとらわれる事がないようにするのである。このようにすれば浩然の気が、自然に養われるのである。これが発しては人を度い世の中を淨化するはたらきとなりたとえ自らを度うとは言わなくても、自から度われるのである。

(十六) ことわざに「道と魔が相争う」といわれるが、一体道と魔が争うのであろうか、それとも魔と道が争うのであろうか、道は何処にあり、魔はどこにいたのであろうか。魔というのはすべてが心より起つて来るのである。心は道の源であり、又魔の居るところでもある。一念の正しい心が道であり、一念の邪よこしまな心が魔である。その修とはこの心を修めることであり、そこでこの心を省察し、克治(註)して過あやまちを改め善よに遷うつることができれば、心すなわち道であり、そうなる道も消滅してしまふのである。これは魔が道に勝つということである。心とは善悪の出発点であり、又道魔の分岐点でもある。どうして襟を正してこれを戒め悟らないでいられようか。

(註) 克治とは、自分の私欲に打ち勝つて、邪念を治めることである。

省察とは、心のはたらきが天理であるか、人欲であるかを省みることである。

(十七) 神事に於てその人の功行を誉めたたえるのは、有形にはその事を論じ、無形にはその心を見るのであり、そこにはもともと神の真意がかくされているのである。その功行を称讃するのは善を勧めるゆえんであり、善を勧めるのは修めることを励ますゆえんであり、修めるのを励ますのは道を明らかにするゆえんである。道を明らかにしてこそはじめて慈を宏めることができ、慈を宏めてはじめて過去の悪い因縁から免がれることができ、その悪い因縁から免がれてこそはじめて悟りの成果を得ることができるのである。すべて功行を称讃するときには、うわべだけではわからない。仙人や仏が述べるところの真意を体得し、努めて善に向つて修めるべきである。これによつて道を明らかにし、慈を宏めることを志せば、自ら過去の悪い因縁から解脱して悟りの成果を得ることができるのである。

(十八) 堅誠、中正なるものは、その固有の靈を培い、その先天の炁を固め、そ

の慈悲の志を宏めれば、その救済の願いを実現することができ、魔にも惑わされることなく、如何なる困難にも動揺することがないのである。

(十九) 堅誠なる修養で言う毅力(強固な意志の力)の功行とは、よいと知ったら必ず行い、しかも敢然(かんぜん)として勇氣を以てこれを行うのであり(義を見てせざるは勇なきなり)、そこで善(ぜん) (よい事) と知っていてもこれを行わず、悪(あく) (悪い事) と知っていてもこれを改めないということがあってもならないのである。

善を聞いては必ず積極的にこれを行うことができれば、自然に幸福と長寿を保つことができるし、又悪を聞いてはこれを我が身に省(かえ)りみて仇敵(さやうてき)の如く憎み改めれば、自然に災禍(わざわい)から遠ざかることができるのである。したがって功(功德)は悪を取り去って善をなすより大きなことはないのである。過(あやまち)は善を取り去って悪をなすより大きなものはないのであり、徳行(とくこう)は博愛より高いものはなく、行(おこな)いは実践より高いものはなく、修(おさめ)るにはこれを固く堅持して継続するより高いものはなく、養(おのれ)は己に克つ(自分自身の欲望や、妄心に打ち克つこと)よ

り高いものはないのである。

(二十) 誠の一字は、天地万物を貫ぬき、至誠にして永遠に息むことがないのが道である。一誠不二(誠一途にして、二つに分れないこと)とは、己自身を度い成就し、万物を度い成就し、人を感化し世の中を化うところの真の功行である。心を正しくし身を修めるには、必ず誠にもとづく(註一)、日常の人の踏み行うべき道や、人との応待や、出処進退や、三綱五常(註二)や五倫八徳(註三)などはすべてがこの誠によつて貫ぬかれているのである。忠恕の道(註四)や克己の修養も又必ず誠にもとづくのである。いわゆる己自身や他人に感応し、又神に通じるといふのは、すべてがこの誠に應じてはじめて感応するのである。誠でなければ物がなく(註五)一人が誠でなければ、一家を害し、十人百人が誠でなければ、社会国家を害し天下国家を挙げて偽りに赴き、骨肉相食み相互に欺き騙しあつて争い競い合つて、いつまでも平穩無事ではあり得ないのである。

(註一) 大学に、身を修めるには、その心を正さなければならぬ。その心を正

すには、その意（念）を誠にしなければならぬとあり、またその意を誠にすることによって、その心を正すことができる。その心を正すことによってはじめて身を修めることができるのである。そこで身が修まって家が育とこのい国が治たままり、天下が太平となるのである。

（註二）三綱とは、君臣、父子、夫婦の道、五常とは仁、義、礼、智、信

（註三）五倫とは父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼ちやうの序、朋友の信、八徳とは仁、義、礼、智、忠、信、孝、悌。

（註四）忠恕とは、論語で孔子が言うには吾が道は、一以て是を貫ぬくとあり、弟子が更に一とは何ですかと問うた。孔子がいうには忠恕だけである。

（註五）中庸に誠は物の終始であり、始めなく終りなく永遠にはたらいている。誠がなければ物の存在もあり得ない。この故に君子はその誠を最高のものとして、最も尊び最も重視するのである。

（二十一）福は禍わざわいの倚よるところであり、禍は福の隠れひそんでいるところであり、

それはただ人が禍に遇あつたときおそれつつしみ悟るところいかによるだけである。たとえ福を得たとしても、驕おごりたかぶって自らうぬぼれていれば、たとえ福が来ても、実は禍の発端はつたんとなるだけである。もし禍にあつてもおそれつつしみ、励んで修行すれば、禍を転じて福となり、危険な状態もこれを平穩な状態かに復かえすことができるのである。

(二十二) 心とは先天と後天のすべてをつかさどるところの中ちゅう枢しゅうである。後天の氣質を論ずれば心が一身の主宰であり、これを先天の炁き化くわにさかのばれば、心が性靈の源泉である。心がすべての主宰となれば、日常のすべての行動は、とどこおりなく順調に進むのである。又世に処し事に対応しても、すべてが的を得てつばにはまるのである。そこで日常心じつじょうを養うことができれば天人(天神)に貫通して本性にしたがい、天命を受け(註一)道を展ひらげ、慈を宏め、人を度すくい、世の中を浄化するのであり、それには心こそが最も主要なキーポイントとなるのである。心とは人としての大本おもとであり、古人も「本立もとたちて、道生みちうず」と言い(註二)先天

の炁きが凝こって神しんが聚あつまり、そこで万事みな備わるのである。もし心を養うことができず、その主宰うしなを失うしなえば初めのわずかな違いが、後のちには大きな違いとなるのである。心を養う人と養わない人を比べれば、最初はわずかな違いしかないがこれが長期間にわたってくれば、最後には天と地ほどの開きが出て来て身を滅ほろぼすことになるのである。もしそうなたら如何なる名医と言えども、これを救うことはできないのである。

(註一) 中庸に「天の命これを性と謂い、性に率したがう、これを道と謂う」とある。  
(註二) 論語に「君子は本もとを務む、本立てば道生ず」とある。

(二十三) 心は能よく仏ともなり、又衆生しゅじょう (凡人ぼんじん) ともなる。心は極樂ともなり、又地獄ともなる。もし心が空となればすべての道は清浄となり、これに反して心が有となれば万境ばんきやう (心外しんがいのすべてのもの) が心中しんちゆうに入り乱みだれて、苦しむことになる。善因ぜんいんはついに善縁ぜんえんに出遇い、悪行あくぎやうはついに悪い境遇きやうごから逃のがれることは難しい。甘露かんろによつて身を潤うるおし快適を得るのも、それは他たから授かるものではなく、

又逆境に遇つて塗炭の苦しみをなめるのも、すべては自らがこれを招いたのである。そこで天より生じたものでもなく地より出て来たものでもなく、それはただ最初の一念に起因するのである。

(二十四) 禍と福を得るところの道は、正しい念か邪な念か、又善い行いか悪い行いかに根ざしており、善であれば福を得るし、不善であれば禍が訪れるのである。その禍と福を転換させるところのキーポイントは、すべてが人によって天にはないのである。そこで人生の運命というのは、各人が同じではないが、しかし禍と福は結局自らがこれを招いた結果に外ならないのである。

(二十五) 心は虚であるが、言葉と行動によって、その心を見ることができる。言葉は心の声であり、行動は心の足跡である。この二つのものは心に思っていることが具体的に表われたものである。心に思っているところがあれば、はじめてその言葉に現われ、その言葉を実行することによって、はじめて行動にあらわれ

るのである。自らの行動によって、世のため人の為に尽し、これに幸福をもたらすことを功德くどくと言う。又己の徳を以て人に施ほどこすことも同じ功德くどくである。

(二十六) 善をなせば祥(幸せ)が降りてくるし、道を行なえば福が得られる。

古人が言うには自分自身の良心を欺あざむかないことが最も大事であると言っている。

ただ明あかるいところと暗いところ、早急なところと緩慢なところに於て、詳細に点検することなく、或は徹底してこれを理解することができず、それこそ善いものが不遇であり、悪いものが常に栄えていると思つてゐる。この中に含まれてゐる真理を求めれば、必ず割然かうぜんとして貫通し、これを悟ることができるのである。その原因は天地が善人に報あやむるには、物質を以て厚あつくこれに報あやむ、或は人々の精神の快適を以て、これに報あやむ、或は平穩へいおんな生活を以てその善人に報あやむ、或は子孫の繁栄を以て福德むくに酬むくむるやうに、天が善人に報あやむるのはこのやうにいくつもの報あやむかたがあるのである。悪人の懲罰ちやうばつもこれと同じやうにいたるところで見られるのである。ただ獎しょう(賞)だけがあつて、懲罰ちやうばつがないというのは、表面的な觀察に

過ぎないのであり、実は契と懲の間は、あたかも影が形に寄り添うように、両方が緊密で離れることなく、少しも違ふことはないのである。ただその善悪の報いの訪れが早いか遅いか、またそれが表面に現われているか、まだ隠れているかの違いだけである。

(二十七) 成見(せいけん) (先入感(せんにゅうかん)や既成概念(きせいがいねん)) と定見(ていけん) (一定不変の正しい見解) の区別は、成見はあつてはならないが定見はなくてはならないのである。成見とは人や物に接する時、先入感にとらわれた見解である。世の中を渡り、物事に対処するには、謙虚でおだやかであることもとし、物事に固執(こしつ)してこれを争うことは避けなければならない。又私見に頼り私意にとらわれることが習性となり、紛争をひき起し敵をつくつてはならない。世俗における成見の害は禍根(かこん)を残すことが多いのであり、したがって成見はあつてはならないのである。これに対し、定見とは自分自身に対して言うのであり、即ち己自身の欲望や妄心に打ち克つて、身を反省し身を修めることを指すのである。人を濟い万物を利するには、これを堅

持し、これを継続して、勇往邁進しなければならぬが、逆に人の言動にまよわされ、環境に動かされ、ためらつて決することができないようであつてはならない。又波のまにまに流されて、仁義に逆くような行動があつてもならない。したがつて定見はなくてはならないのである。一日に三たび省みて、日常生活の間に於て常に不正の念を起さないように工夫し、又正しい道を踏み行つて、たとえ恩師であつても正しい道の前では譲歩せず「義を見てせざるは、勇なきなり」とあるように、自分の信ずる道に勇往邁進することが定見である。

(二十八) 修養の工夫は、すべて吾が心の内にあるのであり、まず常に自覚し、自らを責め、過ちがあれば懺悔してこれを改め、善をなし、悪を去り、人が危い時や、困っている時にはこれを助けるのは、みな真心より発してこれが真実の修養にあらわれてくるのである。また災劫をなくし災難からまぬがれるには、禍を転じて福となすことが、唯一の方法である。それが神に祈つたり、占に頼つたりして、神靈の加護を祈り、福を求めたりする必要はないのである。若し自覚して

も心が迷いからさめなければ、禍は常に眼前にあらわれ、たとえ後悔しても手の施しようがないのである。

(二十九) 慈悲の心を持ち、慈悲の心を行ふのは、人心の禍を化すところの本である。貪り求めて厭くことを知らず、又陰に陽にあらゆる方法で争つたりだましたりするのは、人心の災劫を造るところの原である。大災劫が起きるのは自身の一念にあり、又大災劫を化すのも自分の一心にある。そこで心や一念の持ちかたは、善悪の根本に関するキーポイントであり、又禍福の兆が隠れているところでもある。又この間の消息は個人と家庭の安危にかかわる最も重大な問題である。

(三十) 修道する人の多くは自分には才能がなく、宣道(道を説くこと)や辨道(道に関する仕事を行うこと)ができないことを嘆き、そのために気おちして熱意を失ない、ついには修道をおろそかにして、自暴自棄となりこの一つの錯覚が

大きな誤りをつくり出すことになるのである。そこで修道する人は自ら道（心）を修め、自ら道を行うことを以て主要な任務とするのであって、必ずしも宣道や辨道することは、たとえ必要であつても、これは主要ではないのである。思うに自ら誠実に道を修め、道を行うことができなものは、その宣道と辨道もうわべだけのものであり、必ず徹底することができないのである。そこでまことに自ら道を修め道を行うことを以て根本とするのであり、又自分の精神力や誠実さを以て基準とするのである。たとえ慈善を行うにも、まず自分の力を量り、自分の心を尽し、金額の多少にはよらないのである。言行を慎しみ、言つたことこれを実行し、天理に順い人情に合し、少しでも人に損を与え自分だけを利することがあつてはならないのである。又修め悟ることに勤め、己自身の妄心や欲望に打ち克ち独りを慎しみ、自らを省み、自らを責め、少しでも自分と妥協して、自らを恕す心があつてはならないのである。これらはみな如何に能力や才能がないといつても、やろうと思えば誰でもできるのである。又少しばかり進歩したからと言つてうぬぼれてはならず、また長期にわたつて効果があらわれなと言つて怠つて

はならないのである。それはたとえ効果があらわれていても、自らが自覚できない事があり、その修行の程度によつては、怠ることなく続けていけば、或る日突然悟ることもあるのである。そこでその境遇の如何を問わず、当然道を修めることを堅持しこれを継続して、毅力さりよく（註）をもつてもちこたえるべきである。そうすれば道を修めるところの願望を成就させることができるのである。

（註）論語に「士は以て弘毅こうきならざるべからず」とある。その意味は、その士気が毅然として強く広大である。

（三十一）練ねらず、坐らなければ、道は正に峙た（立）たず、修めず、守らなければ、道は將まさに永とこしえに墮おちん（北極真経）にあり。

道とは宇宙間の法則であり、良知良能（註）は人心の自然の法則であり、練り、坐り、修め、守ることは、道をたもち、道を成ずる自然の法則である。そこで中を以てこれを練り、平を以てこれに坐し、正を以て、これを修め、直を以てこれを守るのである。中、平、正、直は大道の自然の法則であり、また良知良能の自

然の法則でもある。道を修めるには、中、平、正、直を以て基準とすべきである。何を以て善に帰し、何を以て悪を除くかといえば、中、平、正、直である。

眞経でいう「法を奉じ、則を守る」とは、中、平、正、直を奉じ守るのである。

聖人、神仙、仏は、自然の法則を明らかにし、修練をして、少しもこれをゆがめて、いい加減にすることがないので、これが物事を成就させるところの原因である。

(註) 孟子に「人の学ばずして能くする所のものはその良能なり、慮らずして知る所の者はその良知なり」とある。その意味は、人が後天的に学ばなくても、これが自然によくできるものが良能であり、また人が後天的に思慮をめぐらさなくても、自然にこれを知ることができるのが良知である。

(三十二) 偉大なる賢者といえども、過失を犯さないということはないのである。その一般の人と異つてゐるところは、ただ能く改めるだけである。善を見れば、自らに至らないことをおそれ、これに追いつくように努めるのであり、不善を見

れば（註）熱湯に近づいて火傷をしないように、これから遠ざかるのである。このように毎日自らを修め、いささかもこれをゆるがせにしないので、これが偉大なる賢人となるゆえんである。

一般の人は、修行の道理を悟らず、したがって日常の言行は、自分の意の如くほしいままにし、種々の罪業や悪因を積み重ねているのである。

もし、速やかに反省、懺悔し、過を改めて善に帰れば、悪因を化して善行となすことができるのである。ただ自ら過ちを知って、これを改めない者は、悪因によつて、善功がけずられ、ひとたびこの善功が尽きてしまえば、罪業の報いはこれにしたがつてきて、あまりにも悲惨な結果に陥るのである。そこで自らよく悟りよく修め、修行に励むのである。

（註）論語に「善を見ては及ばざるが如くし、不善を見ては湯を探るが如くす」とある。その意味は、人の善行を見ては、自分の至らないことを反省し、これに見習うように努め励むのであり、不善を見ては、煮え湯に近づいて火傷をしないようにこれより遠ざかるのである。

(三十三) 心君(心の中の主人公)は、本来清静せいせいにして、性靈は本来光明そのものである。ただその私利私欲のほのおが盛んに燃えひろがり、そのために人の性靈は焼き尽くされて灰燼かいじんとなり、心君はその主体性を失ってしまうのである。故に善く身を修める人は、心を修め、守るのである。この守るとは、この清静せいせいを修め、守ることによって、心君の主体性が確立され、またその心中の虚空こくうを守ることによって、その性靈を固めることができるのである。

いかなる所を修め、いかなるところを守るのか、一言ひとことでこれを言えば、それはいぜんとして一心にほかならないのである。

各宗教の教祖や聖人、神仙、仏などが、その多くの教典によって、いろいろな教えを述べられているが、人心の不正を救済し、大災劫さいごうをなくさんがためのものである。

たとえば心を修め、心を練り、心を明らかにし、心を洗い、心を清める等々は、すべてが心を修めるところの極意ごくいである。

結局は修め、練り、明らかにし、洗い、清めることなどは、いかにしてこれを完成させるべきであろうか、必ず、坐を修め静を習うことを以て発端とし、そこでこれを堅持し、継続して、志氣が毅然（註）として広大なる力を持って、漸次に進めていけば、偉大なる効果をおさめることができるのである。

（註）論語に「士は以て弘毅ならざるべからず」とある。その意味は、その士氣が毅然として強く広大である。

（三十四）北極真経では、「度いは自ら度わず、度いは吾心よりす」とある。そこで、吾が心に至っては、いかにしてこれを度うのであろうか。この問題は深く究めるべきである。この心の中には、後天に生れてきて積り積った習性（不正な習慣）や、物欲による執着やとらわれによって汚されている。仏がいうには、「五蘊が皆空であることを照見すれば、一切の苦厄を度う」とある。この五蘊とはまた五陰ともいい、すなわち色・受・想・行・識の五つの器官である。一般の人民は、この五つの器官が集まって身体が形成されている。故にこれを五蘊とい

う。第一に色蘊といい、これは有形の物質を指す。すなわち眼（色を見る）ところの根である。耳は、音声を聞くところの根である。鼻は匂いをかぐところの根である。舌は味覚の根である。身は物に接触するところの根である。意はものを意識するところの根である。これらが六根であり、また六識（六根によって知りえたことを六識という）のである。第二に受蘊といい、六識によって六塵（目で見ては色塵となり、音で聞いては声塵となり、匂いでかいては香塵となり、味覚では味塵となり、物に触れては触塵となり、心の法とは識塵によって汚される。この六つの六塵によって、心が汚され迷って悟ることができないのである）。三に想蘊といい、識が六塵に応じて起す想像のはたらきをいうのである。四に行蘊といい、意識や思想のもろもろの塵を謂い、善悪のもろもろの行いをなす作用である。五に識蘊といい、外の環境に対してこれを照らし識るはたらきをいい、またそれぞれなすべきことを分別するのが心識である。

そうなつてこれらを化してはじめて五蘊の苦厄を度うことができるのである。ここに至つて我が心に染まり積つた習性や、物欲のとらわれは一掃されてしまふ

のである。「この度いは吾が心よりす」と謂うのである。もし吾が心を度うことができなければ、仏法がいかに偉大であり、いかに善い喩えであつても修行の助けにはならないのである。もしこれらを知つていながら行うことができなければ、それは空理空論に過ぎない、もし空理空論であれば何の役に立つてあろうか。わが心中の一切の苦厄を自ら度うことができずして、人を度おうと考えるのはなんと本末顛倒し、自らを欺き人をもだますことになるのではなからうか。

(三十五) 人びとは生れてきた以上、みな一身に負債(借金)がある。これにはまず運命上の負債、怒りによる負債、子女による負債、疾病不具の負債などで、一生涯あくせく苦勞して、終ることがないのである。

大災劫が来ようとしているときに、その残酷さは我々の想像を絶するのである。狂流(荒れ狂った流れ)や火焰(燃えている火の焰)の中に陥ち込んで、たちどころに燃え尽きてしまうのである。そこでここから逃れようとしても逃れることができない時になつて、いかにこれを悔いても間に合わないのである。そこで日

常生活における実際に修めているか否かが問われるのである。一旦大災害の時がくれば、天を呼べども応えず、地を叩いても援けがなく、施すべき方法がなく、どうして哀しまないでいられようか。

大災劫がまだ起きない前に、もし迷いから醒めて覚ることができれば、天国も地獄もまだ自分で選択することができるのである。慈航（度の船）は永遠にいつでもどこでも存在しているのである。早急に改心すればただちに度われるのである。

道慈の度化に努め、以て劫数（負債）を有形無形の間に変化して、はじめて人を度い自らを度うことができるのである。

（三十六）修方の言論と行動は、その影響するところ重大である。もし言行が一致せず、言うことと為すことが違っていれば、ただ個人の墮落だけではなく、世間の人の道慈に対する印象や感化にも大いに影響するのである。

まだ求修していない人から見ると、話している道理はただ理論にすぎない。そ

こでこの理論も実践が伴わなければ、相手を感化させることができず、それと同時に、人からも批判されることになり、又全体の道院・紅卍字会・女社の前途に對しても、関連するところ極めて重大である。

たとえ如何に咒や経を誦え、常に訓文を読んで勉め励んだところで、功罪相半ばして大自然の尺度でこれをはかれば大いに開きがでてくるのである。修方というのは戒しめ悟って一層努力しなければならぬのである。

(三十七) 修めることは一心にあり、成就することも一心にある。心性の光明がすなわち一身の仏であり、仏がすなわち心の本体である。本体の仏を悟ることができれば、どうして他に求める必要があろうか。心の外に仏を求めるところはなく、又心の外に度うところはなく、心の外の欲望や煩惱を除くことは難かしく、又心の外に苦難の道を克服することは難かしく、心の外に彼岸に至る(極楽浄土に至り度われること)道はないのである。

もし本心を識らなければ、道の深遠なる奥義を学んだところで、いぜんとして

無益である。道を修める人は何千何万といるが、はたして何人が能く目覚めて改心し、本心を識ることができらるであらうか。

(三十八) 修養に志すものは、初めに矜せう(うぬぼれ、おごりたかぶる)の一字を戒いましめる。矜の一字を戒めることができれば、則ち躁そう(いらだちやあせり)、偏へん(かたよる)、急いそぐ(いそぐ)はこれにしたがつて改めることが出来るが、矜を戒めることができないければ、躁、偏、急はこれによつて起つてくるのである。日常に於ける過失、大奸大悪は、皆矜、躁、偏、急によつてつくりだされるのである。その中でも矜の一字を戒めることが最も大切であり、矜であれば必ず躁さわがしく必ず偏かたより、必ず急ぎ、平常心を失ない、人と我れの間に見が衝突しょうとつし、各人の述べる意見によつて逆に真理の所在がくらまされてしまうのである。そうなれば自分自身の修養の面に於ても必ず損害を受け、事業に於ても、必ず暗礁にのり上げ、家庭に於ても、必ず親子夫婦の間でも心が離れていき、社会に於ても、必ず孤立し、友人の間に於ても、仲間はずれとなり、自分の心に於ても、必ず平穩快適な楽し

みを失なうのである、ここまできると修養は扱<sup>よ</sup>りどころを失ない、其の他の成果を上げることができないのである。

(三十九) 人生を全体的に見てみると、大悟<sup>だいご</sup>徹底して苦海(この世の中)から離れたものを除いては、この世の人間は地獄に於て、毎日争いや騒動<sup>さうどう</sup>を起さない日は一日もないのである。苦海の波はすべてを呑み込むようにどんどんと押寄せ、繁栄と没落、上に浮き上る人や、下に沈んで行く人は皆またたく間に一場<sup>いちじょう</sup>の夢となり、幻となり、空となり、ただ禍根の負債を残すだけである。富貴と貧賤を問わず、士農工商の人々は、一生涯あくせくして、片時の間も苦痛から逃れることはできないのである。一たび臨終の時が来れば、すべてのことは皆鏡にうつった花や、水にうつった月のように幻影となるのであり、更に財貨や地位名誉など、明らかに一時的な仮<sup>かり</sup>の物であると知っていながら、ちよつとやそつとではこれを放棄<sup>ほうき</sup>することはできない。そこで一時的の仮の物を手離すにしのびないので、真実の物を手に入れることができないのである。

聖人、神人、仙人、仏と言えども、大いに救済の手をさしのべてこれを度おうとしてゐるが、しかし救済できるか否かは全く各人の一心の悟覚さとりにある。吾が心が懺悔ざんげしてその過ちを改めず、大道の真理を悟ることができなければ、神仏といえども救済の手をさしのべることとはできないのである。「度いは自ら度わず、度いは吾が心よりする」のである。

(四十) 道を修める人は、道を明らかにしないのではなくて、ただ自らの心中にある貪欲や執着を打ち破ることができないだけである。悲しみや、物を失ない後悔すべき境遇に至っても、依然として一時の間あいだでも、貪欲や執着のとらわれから抜け出すことができず、そこで臨終に至り魂が体から離れる時になれば、いかに後悔してもすでに遅く、生前に切実に修業をしなかつたことを、どうしてこれを悲しまないでいられようか。

(四十一) ある人は修行したいと思つても、どこから手をつけたらよいかわから

ない。権威や地位もなく、また金銭や勢力もないので、道も修めることができず、慈もまた行うことができないと考えている。このような考え方は、もし故意に責任のがれをするのでなければ、それこそ根本的に誤りである。自分には自分のなすべき本分があり、自分の本分の範囲内で道を修め行うことができれば、それで充分だということがどうしてわからないのであろうか。親に孝行し、人に慈悲をほどこし、仁義を行い、人と和し、誠意を尽くし、信義を重んじて、感化し、実行することができれば、世の中を救うのである。これらは各人の本分内で実行できるところの宝庫であり、自分で自由に選択応用することができるのであり、また金銭や権力をもってこれに替えることはできないのである。自分自身の内にあたる豊かな宝庫の中で、どうして着実に修行し実行せずして、他人の金銭や権力を羨みねたむことがあるか。しかも金銭や権力が、多くの人を罪惡の門に引きずりこんでいるということはどうして知らないものであろうか。試みに昔から今まで見てみても、金銭や勢力を持っている者で、はたして何人が能く真心から修行したてあろうか。もし自分が本分の豊かな美田の宝庫を捨てて、人を犯罪に陥し入

れるところの金銭や権力の誘惑を羨んでいる者は、それこそ真正正銘の大馬鹿ものである。

(四十二) 善には多くの種類があり、悪も多方面にわたっている。したがって善を誉め、悪を罰するにも、時には善悪を顛倒して理解に苦しみ、天の報いも不公平であると恨んでいるが、これは世間の人々がただ表面だけを見て判断の基準としているだけである。

天の見るところは、ただ各人の隠れて微かな心の源のきざしをすべてお見通しである。

したがって、真実と虚偽、善と悪、忠実と奸悪、虚と実は、すべて表面に現われて逃れることはできないのである。もし先哲の経験にしたがって、詳しく分析すれば、何事も人の為になること即ち人を利するといふ心をもって、善のためおおひのためにすることと、何事も自分の利欲のためにすること即ち自分自身を利して私心のため悪のためにすることは、共に同じ利の一字である。人を利するのが

公おおやけであり、己を利するのが私私心であつて、そこで善と悪、賞と罰罰が分れるのである。同一の功行功徳であつても、心持ちや考え方がそれぞれ異なっているの、したがつて賞罰や報いも同じではないのである。

たとえば表面は恭順であつても、内には不平不満や悪い考えを持っている人、あるいは名声がいかに高くとも中味がこれにとまなわれないもの、表面は善であるが内面は悪であるものなどには、必ず不測の災害がある。また過失や罪がなくなつて思いがけず悪名をこうむり、内心が正しいのに、表面的には罪をこうむるものは、必ず子孫が繁栄する。忍び難きところを能く忍び、捨て難きところを能く捨てるものは、福徳の報いが特別に厚いのである。もし財産と権勢権勢が満ち足りていれば、徳を積むことは必ず容易である。容易であるからといってこれをなさなければ、自暴自棄ぜうぜきに陥るのである。また貧しくて賤いやしいものが、福徳を行うことは必ず難かしい。たとえ難かしくても、これを行うことは、貴とうとぶべきことである。そこで難かしいとか、易しいということとは、根本的には問題ではなく、すべては一心になつて真誠まことの修業を決意するか否かにかかっているのである。

(四十三) 試みに人の一生を見れば、富貴に一生を過すものと、貧賤に一生をおくるものがある。一生のうちでも、先に富んで後に貧しくなるものがあり、先に賤しくして後に貴くなるものがあり、その中には困窮と榮達、長命と短命、繁榮と没落、困苦、挫折、流浪、浮き沈みなどのいろいろな境遇にてあうのであり、これを総合して運命というのである。

いま試みに運命がどこから来て、何故、人によって違ふのであるかということを追求めてみると、運命は定数(定まっている運命)より来たので、定数によって運命が生じたのである。さらに定数とは誰がこれを定めたのであろうかといえ、すなわち自からこれを定めたのである。

仏教では、明らかに指摘しているように、今生で受けているところの結果は、前世でまいた種に因るものである。今生でなすところのことは、すべてが来世の種を植えることになるのである。原因が結果を生みまたその結果が原因となる。

これを因々果々といい、これは循環して息むことがないのである。

各人が生れて来た時に、みな自分の定数表を持って来て、因果定数の一生の運命がはっきり記載されているのである。これによっても運命というものは、神や仏が決定権をもつのではなくて、すべては自分がつくりだしたところの善悪の定数表（成績表）によるものである。たとえ定数といっても、定まってもいるし、また定まってもいないのである。ただ後天的に為すところの善と悪の増減によつて、移り変わるのである。もし今世で大いなる善徳を積めば、前世の悪因を消して、福祿を増し、困窮より順調になるのである。もし今世で悪行を積み重ねていけば、前世における多少の善因も、帳消しになつて、富貴より苦海に陥いるのである。

たとえ、善因、善徳を積んでも、その報いを期待し望んではならない。この報いは、因果応報の自然の理によつて得られるのであつて、これを人意の願望によつて求めてはならない。それが君子の幸福なる運命をつくるゆえんである。

道を修めるものは、道徳の功行が日に日に進むので、因果悪縁が今世において消失した人は、能く無形のうちに悪縁の機会をなくしてしまふのである。この道

理は非常に明らかで、多数の人が皆これを知ってはいるが、ただ切実にこれを修業し、実行することができないだけである。

(四十四) 多数の知識分子は、始めには志を立て決然としてこれを行うが、その格調が高いのでこれに和して行く人が少なく、又世俗からもあまり受け入れられず、時には世俗の流れに屈し、時にはあざけり笑われて、これを実行することができず、遂には自ら持ちこたえることができないのである。

このように各地で善根を抱いている人も、世俗の大きな流れに押し流されて、これを支えることができずして、濁流に消え去った者が、過去に於てどれ程いるかわからないのである。故に身を修め、道を研め、自らをよくして人を化するには、必ず誠・明・堅・恒を以て功となし、必ず矜・躁・偏・急のあやまちを除いて、信・解脱・行・証の真実を体得することができれば、功候(註)が進み、造詣と理智がともに増し、内面の心志と外面の境遇が次第に合体するのである(主観と客観が一つになる)。大道の大本の根源は、ただその基礎を確立して、しかる

のち縁にしたがつて分を尽し、随時随所で実践しさえすれば、世俗の幻影によつて真中（こころ）が乱されることがないのである。さもなくて向上する気持があつても、これを自覚し体得する力がなければ、たとえわずかに理解できても、自ら迷つてこれを疑い、それは一つのことにとらわれて、多くのものを廃し、これに執着すればあれを失ない、一方に氣をとらわれていと、一方がおろそかになる。これがともすれば修道者には多いので、道を明らかにする者は極めて稀であり、さらに道を体得し道じょうじゆを成就する者に至つては、めつたにいないのである。時に世俗の荒波に阻止されると、まさにその小さい一本の指にとらわれて、その大きな腕を失ない、自分の一身にとらわれて全体の人類を忘れてしまうのである。又その根本が不明なので、因果の報むすいが一度訪むすれてくると、殆どが中途にして挫折してしまうのである。

（註）外に慈を行うことを功といい、内に心を修めることを候という。

（四十五）天が人を生んで、智慧・才能・財貨を授けるのは、どうしてめいめい

の利己心や私心のためであろうか。そうではないのである。

もし精神をみだりに費やし、才能や財貨をみだりに用いても、正しい軌道から逸脱いつだつすれば、世俗の身にとつてはたとえ耳があつても聞いても聞こえず、目があつても見ても見えず、その聰明を失ない、その考えや手足の働きも皆その自主性を失うのである。そうなると身外の一切のもの（財貨、地位、名譽、財力）もこれを維持することは難かしくなり、たとえその時になつて後悔しても間に合わないのである。しかし自ら墮落したものを、誰がこれを救うのであろうか。誰も助けてはくれないのである。ただ才能にまかせて事を誤まり、財貨ざいにたよつて自分の徳を傷つけたことを恨むだけである。これらはみな道を明らかにせず、善に向わず、中途にして節操を変えたり、やったりやらなかつたりするなど、すべては自業自得じごうの結果である。

（四十六）世間の一切の事には、自分の努力によつて成し遂げる事ができるものがあり、又自分自身の努力だけではどうにもならない事がある。自分自身の努力

によつて成し遂げることができるのは、そこには義（正しい筋道）があり、また自分自身の努力によつてどうにもならない、そこには天命てんめいというものがある。君子が徳を進め業を修めるのは、ただ自分自身の努力によつて成し遂げることができざるものを実行し、その己自身の努力だけでは、如何いかんともし難いことは、これを天命にまかせて一切取り上げないのである。

思うに、人生に於ける生涯の過程は、あたかも航海や登山のように、途中の分れ道や又天候の移り変わりで、常に方向を見失つて迷い易く、あたかも舵のない舟や、綱つなのない投網とあみのようなものである。そこで人生に於ける航海も、徳を進め業を修めるところの目的を忘却するのは、舵を失つた舟のようなもので、方向が定まらずどこへ行くかわからないのである。又その中途に於て如何なる困難や挫折そうたうに遭遇しても、又自らを鍛錬や錬磨するゆえんである。ただ自らの内にある主宰を失うことなく、正しい道を踏みはずすことがなければ、必ず一切の障害を克服して、初志を完徹して平安な境地に到達するのである。

(四十七) 富貴にして人に驕れば、多くのものはその間違いがわかる。もし地位や勢力に頼って人に驕れば、人はみなその驕り高ぶっていることをあざけり笑うのである。たとえ学問や才能知恵・功德があつたとしても、傲慢の一念が起れば、たちどころに心中の虚霊がふさがれてしまい、その害毒は財貨や勢力を以て人に驕ることに劣らないのである。

これらはみなおごりが害をなすのであり、多くの者がこれを自覚せず、最も道化(道によって化するはたらき)をさまたげるのであり、そこで自ら点検し詳細に反省しなければ、その病根を抜きとることは難かしいのである。

世間の人は過去に於ける得意なことをほめたがり、その調子にのって自分の長所をひけらかすことによって、自らの短所欠点をさらけ出しているのである。大道の中に於て身を修めるには、空理空論を貴とばず、随所で虚心になつて道を研め悟り、自ら反省し、自ら体得するのである。

(四十八) 歴史の本において、平和と混乱の原因を調べてみれば、その中心にな

る人物が、わずか一念の間に良し悪しを判断して、これを決定することによつて平和ともなり、争いともなるのである。

また人の光榮と恥辱の違いをきわめてみれば、我々の日常生活に於ける言行こそがそのキーポイントである。

そこで君子は戒心恐懼（懼れ慎むこと）して、其の心を存し、本性を養ない常に反省するのである。すなわち人の誰も知らないところ、見えないところといえども、常に十人の目がこれを視ており、十人の手がこれを指さしておるので、少しもこれをおろそかにすることはできないのである。

天理と人欲の違い、人心と道心の違いを識別し、虚中の眞実と心気の運行を明らかにし、意念を誠にし、心を正しくすれば、常に安泰にして快適の楽しみを得ることができるのである。それによつて災害を未然に防ぐことができるのである。

（四十九）人生に於て身を修め心を修めることは、最も大事である。物事に対し浮わつて、浅薄で深く理解しようとしなないものは身を修めることができない。

たとえ立派な理論を述べても実行の伴わないものは修めることができない。時勢や環境が異なれば其れにしたがつて心が移りかわり、始めは熱心に進めるが、中途で挫折したり、又終りに怠る者は、修めることはできず、物事の枝葉末節のみにとらわれて、其の根源を忘れる者や、一時的な仮の物にとらわれて、永遠の眞実を見失う者は、修めることはできない。

世間の人が身を修め、心を修めることを以て迷信とみなし、又修めることを排斥して、目先の利益のみに目を奪われている者は、これをまわりくどい迂遠な道とみなし、又修める人を見ては、今の時世に合わないと思ひ、又修める者に対して時代に逆行して落伍していると批判しているものは、これらはみな、身を修めることを深く研めないで、ついに修めるといふことの眞の意味を知らないからである。

(五十) おもうに心とは、神の居る邸宅であり、身体的主人でもあり、本性・情・意識を統一し、手足や体のすべての部門を運行するのである。

又多くの真理をそなえていて、あらゆる事に応ずることができるのである。それが大にしてはその徳は天地と同じであり、小にしては志に適合し、心が安んずるのは、本来の固有の真心まことこころに外ならないのである。

故に人の困難くわんなんを濟なすけ、その苦しみをやわらげ、又人の苦しみを自分の苦しみとするのは、すべてがこの心である。又人の幸福の為に我を忘れ、一心同体のようにこの慈悲をなすのもこの心である。

それが心とは、本来至極純粹でありながら、物欲がこれに混入し、心は本来正しいのであるが、世俗の情によってこれに染まり、心は本来平坦至極であるが、世俗の塵ちりや汚れけががこれをかき乱し、心は本来広大無辺であるが、長年にわたり、習性によって蔽おほわれふさがれてしまうのである。

これらはすべてが後天的な人心や人欲の妄動が、みな先天の固有の本靈をくらましてるのである。故に心を練って以て無心に至り、心を存して以て堅忍不拔の心に至るのである。

心を明らかにしようと思えば、必ず心を一ヶ処に集中し定める。又心を正しく

しようとするれば、必ずその放心を収めることによつて（註一）不動心を養うことができるのである。この心を治めることは、道を治めるところの本となり、聖人や哲人といえどもこれなくしては、人を度い世を化うことはできないのである。

心中の一念が起きてくれば、すべてが現われてくるし、心中の一念が起きなければ、すべてが滅することになる。「心君泰然として、百体命に従う」（心の主人公は泰然自若として確立するようになれば、全身のすべて一切のはたらくは、この心君の命令に従うのである）。

心中の一念を断絶すれば、外のすべてのものは断絶されてしまうのである（心中に欲しいという一念が起れば、次から次へと執着や煩惱が起きて来る。この欲しいの一念を断絶すれば、外にどんな物があつても、それは無いと同じである）。

「本来無いものを無とし、本来固有のものを有とする」（註二）

そこで又世俗の塵や障や、魔や惑いなどどうして心をくらし、おおうことがあるうか。しかし世俗の一身においては、この道理を明らかにすることは易しいが、これを実行することは非常に難かしいのである。ただ切実に自らを治める者

のみ、これが続けることによつて靈光おのずかが自ら現われ、照し、善功を積み重ねることによつて悪業あくまじやうはだんだんと滅へつていき、又正氣が充実してくるほど、悪氣がなくなつて行くのである。このように身を修め心を養えば、大道の真髓おのずかは自らその要点を把握し、その本源を体得することができるのである。

(註一) 孟子に人は鶏や犬が逃げれば、これをさがし求めることを知つてはいるが、しかし最も大切な心を失つても、これを尋ね求める人はいないのである。學問の要点は他ほかになく、ただその失われた心を取りもどすことだけである。

(註二) 後天的に染まった人欲、執着、汚れ、障さかりなどは本来ないのである。その本来ないところのものを無いとして、先天本来の固有の良知良能や性靈を有し、これを顕現けんげんし發揮するのである。これは修道の極意である。

(五十一) 外にある一切の相さう(有形の相すがた)を打ち破ることは易しいが、内にある我相がさう(自我の相)を打ち破ることは難かしいのである。一切の執着を打ち破ることは易しいが、内にある自らの我執自我に対する執着を打ち破ることは難かしい。

故に四つの相（我相、人相、衆生相、寿者相）（註一）は無我を以て先とするのであり、四母（意なく、必なく、固なく、我なし）（註二）は我無しを以て終りとするのであり、その意味は先の我相と終りの我執は全く同じである。これらは道を修める人にとっては、最も適切なる教えである。

（註一）

「我相」というのは、すべて自らの身を愛し、終日あくせくとして名を争い利を奪い合うことで、自分自身のためにはかり、子孫のためにはかるのは、みな「我相」である。

また、相手によってそれぞれ態度が異なり、権勢や利益があると見ればさかんにとりいつてうまいことにありつこうとし、衰え困っているものを見れば、不快に思つて嫌がり、人が持っているところを妬み、人の頼みには出し惜しみをするのは、みな「人相」である。

すべての受（五蘊の中の受蘊は境に対して事物を受け入れる心の作用）、想（境

に対して事物を想像する心の作用)、行(その他境に対して瞋り貪る等の善悪に關する心の一切の作用)は、その和合をあばき、貪瞋痴愛(貪欲と瞋恚と愚痴の三毒と物を貪り染着する愛)は、靈の源を埋没してしまふ。これはひとしく「衆生相」である。

すべて香を焚き祈禱して、現実に無上の幸福を求めんとし、煉藥燒丹(道家の丹藥をねること)して、不老長寿を願うのは、ひとしく「壽者相」である。

この四つの相を修め(無相の相)、しかるのちはじめて菩薩の境地に達することができる。

(默真人訓) より

(註二) 後天的な人意による意識や思慮がなくなり、物事を為しても、その報いや報酬を求めることがなくなり、物事に固執することなく自然にまかせること、我執がなくなること。

(五十二) 人が生れて来てから、各人の氣質は同じではないのである。後天的に染つたよくない習慣習性にとらわれて、毎日の生活は、不和、不純、不正の異常な状態に陥ち入り、覚さとることができないのでありその殻かは硬くてなかなか打ち破ることができないのである。

真誠まことに道を修める者は、必ず自己の欠点を認め、つとめて自からの私欲に打ち克ち、邪念を治めることに努つとめて、それによって常に後天的に染つたよくない氣質の殻に閉じ込められることがないようにするのである。また常に自らの本心、本性を失わないようにこれを存し養うのである(註)、又自らの心が天理(道心)であるか、人欲(人心)であるかを省察(省みる)して、自我の心や私欲を除去し、又人に対して通用しないような考えを起さず、自らの良心に対し恥じるようなことを行わず、このように内心を治めてそれが外面に現われれば、生生發展の機かが随時に現われて来る。そうすれば本来の生生息やむことのない天性が、日に日に復かえり後天的に習い染つたよくない氣質は、日に日に消滅して行くのである。

(註) 孟子に「心を存し、性を養うは、天に事つかうるゆえんなり」とある。

(五十三) 真誠まことに修めるといふことは、心を治める以外に、外ほかに道はないのである。最も憂うれうることは、心の中しんちゆうが小我しょうが(私心・私利私欲)によつて占領され、大我たいが(公心、天理、道心)の入り込む余地がないのである。もし能く私心(人欲)を除けば公心(道心)となる。故に先哲せんてつが述べたように「心を養やしなうには、欲望を少なくするより、よい方法はないのである。また独りを慎む(誰も知らない自らの想念に於て邪念や不正の念を起さないようにする)のが心を正しくするゆえんである。このようにして始めて心の汚れが洗い清きよまり、必ず自分自身の私欲や妄念に打ち克つて、始めて能く心が修まるのである。

念願は心によつて起り、功德は心によつて積まれ、仏は心によつてつくられ、果(因果)は心田(心の田地)に植えた種子の因によつて、得られた当然の結果である。それらは心によつて実証されるのである。

人生の最大の悲劇は、その心が妄心妄想や欲望の中に、埋没まいぼつするより不幸はないのである。このように物にとらわれひかれるのは、それらはあたかも自がら

手かせ足かせ首かせをはめられているのに等しいのである。それは我々の主体である心が、肉体や物質の奴隷どれいになっているが、それこそこれらの人は、牛や馬の畜生の部類に属するものではなからうか。そこで心を害するところの媒介まを根絶し、心を賊そくなうところの敵を消滅して、真中しんちゆうの赤子せきしの心を失わないようにこれを保ち、誠にして真実の心を篤くし、それによって天の心と一体になるべきである。

(五十四) 君子が一般の人と異なっているゆえんは、その心を存している（本心を放失することなく、それを存し養う）ところにある。自分の心は自分の身を救うことができる、またこの心は煩惱や苦厄に本来迷わされることのないのである。

故に自からの本心を知るものは、人をとがめることなく、天命を知るものは、天を怨うらまず、自から積み重ねてきた苦しみの原因、これを浄きよめ、自から植えた苦しみの根を抜き取り、ただこの苦しみをなくしてしまっただけであり、また悪い原因をつくらぬようにする、そうすればどうして苦しみの結果を招くことがあるろうか。

要するに大道は多くの人々に心を修めるように励ますことを尊ぶのであり、心が定まればみだすものなく、心が空になれば有形の相すがたに迷わされることなく、心が平になれば自おのずから静であり、心が澄めば自おのずから清くなるのである。誠とはただ偽いつわりの心をとり去るだけであり、真とはただ妄もうをとり去るだけである。敬つとしむもの

(註) は怠らず、悟るものは迷わず、心安らかにして自然に道理が得られ、心明らかにして自おのずから覚さり、体得することができるのであり、心の本源が清く澄んでくれば、すべては自由自在になるのである。故に苦しみを避けずして、苦しみは自おのずから遠ざかり、楽しみはこれを求めずして、自おのずから楽しむことができるのである。このような楽しみこそが真の楽しみであり、これこそ最も貴ぶべきことである。

(註) 敬とは日常生活において妄念妄想を起さないように努めることである。

(五十五) 筍子たけのこがいうには、〃これを聞くよりはこれを見るにこしたことはない、これを見るよりはこれを知るにこしたことはない、〃これを知るよりはこれを行な

うにこしたことはない、それはただ学んでこれを行なうだけである。もしこれを知って行なわず、たとえこれを行なったにしても、これを手厚く行なうことができず、時機を逸すれば、時間は再び戻ってこないのである。

諺に、「一尺を語るよりは、一寸を行なうにこしたことはない」のである。理論がいかにすぐれていても、実行がともなわず、自から自我にとらわれ、たとえ努力しても感応がなければ、また何で世の中のためになるであろうか。ありのままいうと、施すことと受けることは相対的で相比較することができ、すべて自分の力の及ぶところ、心の安んずるところで、仁を育て善を樂しみ、施すものはすべてが福である。

もし本人が気持の上において、いやいやながら、又やむを得ず、恥を忍んで助けを受ける場合、その本人も心中実に苦しいのである。試みにたずねてみるが、それでも施したいと思えますか、その施しを受けたいと思えますか、最もおかしいことは、福であることを知っていないながら、その福を拒み、また本来その余力がありながら、その機会を失い、自分自身の私利私欲に迷って出し惜しみ、かえつ

て折角のチャンスを取り逃がして、これを人々に譲ってしまい、自からの善縁を  
阻み取り逃してしまうのは、慈善の徳を充実させることはできないのである。

しかも宇宙にはこれと孤立した自我の世界など全くないのであり、また人生と  
いうものは、俗世間より離れて、断絶することはできず、我々が生活していく上  
においては、すべてが社会よりこれを取り入れ、これをすべての人に用いるもの  
は、それぞれ得るべき報酬がありまた尽すべき責任がある。施すものとその施し  
を受けるものとの間には、心霊のはかりの上においては、その積みたて（財を施  
すことによつて徳を積みたてることになる）と欠損（財を出し惜しむことによつ  
て徳を失うこと）は、自からこれを点検することができ、他人がわかるものでは  
ないのである。

内なる心霊の電波は、上帝（神）の波調と異ならないし、本性の光覚ひかりは聖人や  
仏とそっくりそのまま同じである。そこで意化心観（後天の意識を失くなして、先  
天の心眼を以て観みること）すれば、この生死によつて悩み苦しんでいる娑婆しゃばの世  
界は即刻そのまゝそのまゝが不生不滅の極樂浄土になるのである。また天理に通じ本性に

適合すれば、生機すなわち真機であり、心中に自からが楽しむ境地がある。全世界を感化するのは慈善の光であり、ただ天然に順したががい当然のことを為なし、自然に合するだけである。

(五十六) 人生に於て塵のような一身を、この世に寄せているのは、かげろうのようなはかない命であり、光陰矢の如く、川の水の流れのように時はまたたく間に過ぎ去って行く。過ぎ去ってみれば巨大なる万里の長城も、それは一骨董品に過ぎず、昔、豪華絢爛びゅうらんの宮殿も今では廃虚に過ぎず、ああ、人生は百年も生きられないのに、どうして千年もの憂いを抱くことがあるか。はかない夢のような一生に於て、吾が身を幾度振り返ることができたであろうか。誰が生きているうちに、自からを反省するであろうか。そこで自分自身の罪業によって、子や孫が牛や馬のように苦しみをなめるのである。

どうして利害得失に迷わされて、いたずらに悩みや憂いを抱くのであろうか。罪業ざいごうを積み重ねて行けば、やがて天災人禍てんさいじんかが発生し、最後に人類の末日まっしつが訪れて

くるのである。そうなると身外の如何なるものが、自分に残るといふのであろうか。何も残らないのである。そこで死が目前に迫ってきてはじめて後悔することを知り、財貨・利禄りろく・名譽・地位などは水の上の泡と全く同じである。

日常生活に於て、私利私欲をほしのままにして、少しも自からを省みない者は、やがては如何に嘆き悲しんでも、もう間に合わないのである。そこで其の途中に於て、自から反省して悔い改めれば救われるものを、この折角のチャンスを見失ってしまうのは、あまりにも惜しいことではなからうか。

(五十七) すべて道慈のための化渡すくひは、自からの才能を施し、法(道)を施し、身体を以てこれを施し、その物質的な力、精力、心力を尽すのである。

一方では人の幸福をはかる為に、心身を勞し、一方では自分の為に徳を積むのである。有形と無形にわたる因果の法則は、虚(いつわり)ではなく、人間性の無限の光輝を發揮して、次第に人道最高の境地に到達するのである。

いわんや災劫のめぐりが急転し、風雲急を告げ、道慈を行うところの眞の機会チャンス、

修業の眞の功夫が、このわずかな光陰の間に於てはなほおさら大事である。このようにすれば、一刹那の無常の人生の中に於て、自から永遠不滅の成果が得られるのである。

(五十八) 我々が入会する時に述べる誓願に「願わくは眞諦を得せしめんことを、願わくは上乘に到らんことを」とある。これらは吉と凶、神と神でないもの、靈妙と平凡でありきたりのもの等、片方に執われることなく、それによつて多くの人々が、福をささかりご加護を祈るようなご利益信仰の迷いから目を醒ますのである。このように大道による度(心を修め、人を度う)とは、他の教えと比べて同じであつて同じではないのである。

また智者は自から内に自分の心を反みて、愚者は内を反みずこれを外に求めるのである。自からを眞に愛するものは恥を知り、自からを眞に治めるものは、妄念妄心を取り除くのである。それは禍と福にかかわりなく、ただ自からの身心を反省みるだけであり、また困窮と栄達を論ぜず、先ず人格を練つて品格を高める

のである。人生に於ける成果と榮譽は、みな品格を打ち立てることがその基礎となるのである。

そこで心を修めることがなければ、その品位を敦くすることはできず、又品位がなければ道を語ることができないのである。

君子は道（心）を修め、徳を立て、困窮によつて節操を変えることなく、たとえ勢威（勢力や権威）が如何に強大であっても、常にその独りを慎んで、心に恥じることがないようにするのである。

人の一生には常に吉と凶、悔（後悔する）吝（過ちを改めようとしない）に直面したり、又とつさの場合や危急存亡の時に於て、心中にその主体となる中心がなければ、これを恐れ、迷い没落（ぼつらく）してしまうので、ついには自からこの苦しみをりぬけ出すことができなくなるのである。

（五十九）もし僅かでも、我が身が貴いと思ひ、私心（私利私欲）を愛する念があれば、たとえ身は帝王の最高の地位にあり、又天下の富を一身に集めていても、

それはその実権を一時の間、その本人に預けているに過ぎないのである。如何に努力があり、地位が高くても、それは眼の前を通り過ぎていく雲や煙のように、またたく間に消えてなくなってしまうのである。そこで名誉や利益の奴隷となり、人の本性は有形の物質によって迷わされ、その物質もより完全無欠な物を求め、又得失の為に心を悩ませ、ついには大なる患いや苦しみの中におち入り、結局は自分の所有していた富や地位を、全く失ってしまうのである。

そこでこの煩わしい一身の患いや悩みから脱け出そうとすれば、身を修めるところの道を求め、人生の真実の意義を徹底的に明らかにすべきである。そうすれば幻の身がどうして真我（大我）をさえぎることがあろうか。天命の摂理を体得し、幾度も世俗に生れ変わり、災劫を救うところの功をまっとうすべきである。

これらの趣旨を見抜いている者は、後天的に授かった、あらゆる有形のものは、皆一時的にこれらの物質の番をしているのに過ぎないのである。ただし生きていて自分で決定権を持っている間は、精神力にたよって自からこれをよく運用することができるのである。

そこで世を益して自からを益し、人を救って自からを救い、善を宏めて福に至り、徳を樹て天命に順うのは、実に患いをなくし、苦しみを取り除いてすべて一切の災劫を度うゆえんである。

(六十) 人を救うことは、人の道としても当然であり、救われることは人生の不幸でもある。かの世俗の人情のごときは、救われることは嫌だし、又人を救うこともしないのである。あるいは人を救うということが、自分自身を救うことを知っていないながら、これを実行しないのである。この劫の網の中におち入っているものは、自からの謀ごとをめぐらし、自立している者もどうしたら救われるかということがわからないのである。ましてや、慈善事業を行なうには、必ず基本的な基金や事業をもたなければならぬが、しかし善功徳行は自からの悪因を化して、苦厄から脱け出すことができる。更に重要なことは、救済解脱の妙用があり、天人合一にして心靈の安泰に至るのである。

そこで一身一家の加護は、みな福を招くところの道から、自から福を満すとこ

ろの基もとを定めるのである。

(六十一)たとえ福が来ても、これを積み重ねることは容易ではないので、又たとえ福が去ってもこれには気がつかないのである。故にこの福を受けるには、これを惜むべきであり、福を修めるには自からよく、その福の種子たねを植えることを貴たつとぶのである。

たとえ幸運に恵まれても、又その境遇がどんなによくても、皆それらは暫らくの間だけである。ましてや下元かげんまつさ末期の災劫の異変が多発する時に於てやなおさらのことである。たとえ心願の篤いものであつても、実践すればその効果は半分しか得られず、たとえ又有ゆうい為なる人物が奮発して、これに着手してみても、幾らもできないのである。

ましてやこの世に幾度いくたびも生れ変わり劫を救うというところの念願は、その時と場所に応じてベストを尽し、最も大事なことは、その根本の「一」を解決することによつて其の他の諸々の事はすべて解決することができるのである。又根本の一

事を悟って万事に通じるようにしなければならぬ。

時は一瞬あいだの間に過ぎ去って行くのである。後になって後悔しても追いつかないのであり、これこそ道を修める者がおそれ慎むべきところである。この故に仁じんを行ふに当っては誰にも憚はばらず、そこではじめて善を樂しんで倦うむことなく、自身の本性を尽すことができるのである。更に必ず人の善事を助成して功德を施し、徳を助け善を宏めれば、福運がたちどころに増し、福氣おのずが自から充ちてくるのである。

最も恐れることは、私の意思で自からを制約し、その上他人のでき得る功いこう行も阻害することであり、罪、とがや過失は言わなくても自からが知っていることであり、これは我々の切実に戒めるべきことである。

(六十二) 象牙、真珠、虎の皮、凡夫ほんぶの抱かかっている玉等たま、貴重なものはどうして末世まっせに於て多くの人からねたまれるのであろうか。それは一般の人には手が出ないので、これをねたまただけである。

昔から道を修める者は、淡泊にして己を虚しくして、世に遊び、その往来は自然に任せ、物を物として、これを自然に駆使してとらわれることなく、物に使役されず、またどうしてわずらわされることかあるうか。人の困厄こんやくは各人の数かず（運命）にあり、しかし大半はこれらの真珠の玉や虎の皮に迷わされ、つきまとわれしばられているだけである。

今この世に処して、もしこれを明らかにすることができれば、生活を犠牲にしないという範囲内で、道義の為に尽すことができるのである。たとえば他人が自分を迷信だとあざ笑い、自分が立ち遅れていると非難されても、自分は眞実の生活の中から、他人の最も貴ぶべき真珠の玉や虎の皮を次第に忌み嫌きらいこれらを見無視するのである。これは最も智慧のある哲人の至極適正の道でもある。

いわんや善をなし、吉兆（吉のきざし）を降おろし、道を行い、福があるに於てはなおさらのことである。昔からの教えにもあるように、どうして自分を欺あざむくことかあるうか（欺あざむくとは妄もうである、そこで妄念妄想を起して、心の靈明をくらましおおうものはすべてが、自からを欺くことになる）。

(六十二) 募金を勧めるものもとより方便の縁である。しかしながら神事においての重要な考え方は、真実に修めることを重んじるのである。自からその身をけずり、その真実に感じ、その誠をつくし、はじめて特殊の力をそなえることができるのである。もし自から出し惜しみ、躊躇して、他人のお金かねや力によつてわがことをなそうと願うのは、神事においてはそういう方法はとらないのである。すべては自分の真誠まごころを尽すことにある。そうすれば縁にしたがつて相感応するのが、また自然の善機にして、はじめて大道の真霊を降したことにそむかないのである。

これに反し、世俗でことをなすのに、ただ形式を重んじて、原則を重んじなければ、たとえ成功したとしても、天意(神の意志)と人道(人の道)との交流がなければ、恐らく相手を感化して動かす力はないであろう。

(六十四) 時勢は時々刻々に移り変わり、またその各人の因縁も同じではない。道

心と世俗の心とでは、どちらが重く、どちらが軽いのであろうか、またどちらが急を要しどちらが緩慢であらうか。

道に志す人は、現実の名利みやうりに迷わされて、天と人（神と人）が相通じるところの眞の知慧の機（はたらき）や覚さとりの道を見失うことがないのである。もし各人の心中において、利害得失を貪むさぼり求める念を起せば、本末顛倒し、主客（主要なるものと主要でないもの）とところをかえて、迷路に陥おとり、そこから抜け出すことができず、いつまでも生死の間を流浪るろうして自からが苦しむのである。

（六十五）たとえば学識、地位、才能、財産などの境遇が同じであっても、その結果が多く異なるのは、どうしてであらうか。それは君子においては、その徳を積み、その徳業を広めるが、小人においては、いたずらに名利を貪むさぼり、世俗の苦勞を増すからである。

故にこの世のこの時において、同一の機縁であつても、道を修めるものは道に努つとめ慈を広め、迷いより抜け出して清静せいせいの境地に至るのである。しかし俗人にお

いては名を競い利を奪いあい、悪因を積み重ねてやがて禍いが起ってくるのである。これが同じ境遇であつても、その結果吉と凶が異なり、同じ一門の中においても、その結果苦楽が同じではないのである。これによつても治にいて乱を忘れず、安全なところにおいても常に危険の起ることを忘れず、君子は常に戒慎恐懼（恐れ慎むこと）しなければならぬことがわかるのである。

おもうに道を修めることは自分自身にあり、進まなければ退き、後天的の世俗の妄念がひとたび萌せば、先天の道心はたちどころにくらまされてしまうのである。同一の境遇で、同一の理解をしても、真実の功德を積むところ、真実の道を修めることは、すべてが自分自身にあるのである。

（六十六）忠恕（註）の心を存し、陰徳を行い、平等感を抱き、方便の方法は神事においてはその人やその事の陰徳の行いを見るのであり、それは道院と紅卍字会（以下院会と略称する）だけにはかぎらないのであり、また院会のためにのみ考慮することはないのである。これが神明の公平観であり、また悪因から解脱す

るところの實際の功德である。もし個人的に陰徳を行つてもうまうまいかない場合には、院会で代行してもかまわないのであり、ただ自分自身の個人的な接触や感應だけに頼るべきではない。ましてや無量の善願、無量の善功は、神事においては人が自からこれに努めることを示しており、平凡にして愚かな誠をもっている人に話したり、またこれを対象としてはならないのである。すなわち金銭や物を院会に寄付するのに、わずかな欲心も起さないのは、いぜん最初に発願したものの功德である。

わが道（大道）を努め修めるのに、小乗の説法で道を広めるのは望ましくないのである。真理とは眞実にして不純なものはなく、公平にして固執することなく、つとめて信の意味を明らかにすれば、平々凡々な形式や礼拝のみに陥いることはないのである。諺で言うには、聰明は陰徳の助けとなり、また陰徳が聰明を導くのであり、陰徳を行わずして聰明になれば、かえつて聰明のために身を誤ることになる。そこで身を修めるものは、常にこの言を銘記して、院会の外においても方便を行ない、大道を広め、無形の陰徳をもつて有形の救済をすることが最も大

切である。

(註) 論語に、孔子は「我が道は一をもつてこれを貫く」と言い、弟子が「とは何ですか」と問うと、「忠恕のみ」忠とは自身の真心まごころを尽すことであり、恕とは慈悲の心をもつて人に対することである。

(六十七) 昔からの聖人や哲人は、道を明らかにし、教えを立てるのに、率先して自からこれを行なわなないものはなかった。もし自分自身で実際に行動するといまことう真がなければ、たとえ言論や著述をもつて他人を啓発誘導しようとしても、それはまた、極めて難かしいことである。

たとえば、へんびな片田舎にいる孝行な息子や賢い婦女などは、自おのずから淳朴ぼくどつであり、自からその本分を尽くし、人に知られようとは思わない、また天の報むくいも求めないので、その感応の力は天地に通じて、俗悪なものといえどもこれを感化することができるのである。それでも孝子賢婦はこれらのことを意かに介せず、いぜん何事もなかったかのようにしているのである。以前に誠実朴まこと訥とつな人を見るの

に、その言行は、才智あるものといえどもとうていこれには及ばないのである。したがって功徳を打ち立て、感化するには、先ず自からが心を修め立ち上つてこそ、他人の協力を仰ぐことができるのである。しかしそれには艱難かんなん辛苦の試練をへて、弘毅（註）の心を堅持けんじしもちこたえ、聰明めいじをもって尊しとせず、誠意を尽くすことをもって先決とし、自力を主となし、他力を補助となすのである。このようにしてはじめて、有形無形の間、多くの縁を淨化し人を救うことができるのである。この心の内に充実した道心の光をひとたび發揮することができれば、真の感応によって万事が意の如くなるのである。

（註）論語に「士はもつて高貴ならざるべからず」弘とは、心が広大であり、毅とは、志が確固不動にして毅然としてゐるさま。

（六十八）善を行ない慈をなすのは、その自分において尽くすべき当然のことであり、自分の置かれている立場や境遇、縁にしたがい、その形にとらわれないのである。

これに反するものは、たとえ外面的には物心両面にわたって人を救済すると言つてはいても、その実内面では利害損得を計算しているのである。智者はただ善が己の本心から出たものであり、愚者もまた善を自から行なおうとしているが、それは本心から出たものではなくて、うわべだけのきれいごとに過ぎず、中味がないのであり、自分にとって名誉でなければ、傍観して手を出さないのである。したがって世間には正しい行ないが多いが、しかしただ実行がともなわないだけである。

世の中の人がたとえ善心（道心）を持っていても、その本来の誓願を果たすことが難かしいのは、要はみなその垣根をもうけて、分別の心をおこし、分けへだてる心があるからであり、有形の形にとらわれて執着しており、それこそ本當のねらいは利害得失や勝敗にあり、また矜おこりや誇りをほしいまゝにしている。せつかく善をなしても、かえって不善の因をつくるものは、いずれもみなこのたぐいのものである。

(六十九) 我々がもし修道において、純一無雜で誠実に善に向えば、有形のものにとらわれることがなく、各人の縁にしたがつて、できるかぎりその度化を施し、その功德を成就することができれば、不可思議なはたらきがあるのである。その実際の功德を施しても、少しも名誉を得ようとする心がなく、その功德が最高円満な境地に至っても、世俗の有形の名利に惑わされることなく、「その身を後にして、身先んじ」(自分のことを後にするが、私心を持たないから、かえって人から推されて先になる)。「その身を外にして身存す」(一身を度外視して無私になれば、かえって真の私を生かし、保つことができる)。自我に固執して人より先に行こうという考えがなければ、人は喜んで自分に従うのである。その身に私心や利己心を持たなければ、たとえ我が身亡ぶといえども、道はいつまでも存しているのである。

いわゆる「為して恃まず」(たとえ物事を成就させても、その功勞を誇らず期待せず頼りにしない)。「長じて宰せず」(物事を成長させ成就させても、その功勞に誇って、自から主宰者となってこれを牛耳ることがないのである)。「功成りて居

らず」(たとえその功業が成功しても、その地位に止まることがないのである)。

「聖人は終に大をなさず、故に能くその大を成す」(聖人は無念無想無心の自然の道をモットーとしているので、大きなことをなそうと思わなくても、この自然の無心のはたらきによって、自から大をなすことができるのである)。それは「その私無きを以てに非ずや、故に能くその私を成す」(それは聖人が私心が無いが故にかえってその私、私心の無い私を成就させることができるのである)。

これは昔から中国に伝わっている最高の哲学であり、また道を修め、人を救うところの深遠なる濟度の道でもある。

(七十)三世(前世、今世、来世)因果(原因と結果)の説は、一般の人民に善を行うように励ますだけでなく、実は只今の生活を重んずることにあるだけである。故に因果と言うのはいわゆる現在に過去の結果であり、また未来の原因でもあり、このように結果と原因は時を同じくしているのである。

そこで目前の一言一句や、すること為すことには、すべて因果が存在している

のである。

たとえば田畑は耕作に務めなければ、荒れ果てて凶作となり、又学习到努力しなければ試験に落第するし、又長年にわたる良くない嗜好や習慣は自らを害し、人をも傷なうのであり、これらは皆いい例である。

もし悲しみや、物事を喪失したり、後悔するような時に至って、ややもすればその過失を前世からの罪業に帰するか、或は運命に帰するか、これらはみな迷信のたぐいであり、これらは皆自らを反省せず墮落に甘んじているだけである。最も大切なことは、則ち因果を味まさないということにあるだけである。

すべてのことは始めをたずねて終りを求め、その原因を追求して、その結果を明らかにするのである。善を積まなければ名声を残すことはできず、悪を積まなければ身を滅すことはないのである。したがって因果の深遠な意味はただ自業自得で、自ら感じて自ら招くことにあり、すべてが自分自身の問題であり、本来は絶対に迷信ということはないのである。一般の人に対して言うならば、必ずその結果を畏れ、その原因を慎しまなければならぬのである。

おもうに最高のものは、その最初の一念の幾をつまびらかにし、悪因を悟りこれをなくすのである。その次のものは一念の機を明きらかにし、その悪い因縁を正し、最低のものは必ず外に現わした法律を以てこれを戒め、小さく懲らしめて大きく戒めるのである。末世の世俗の流れを言えば、半分は人間地獄に属しているが、もし心霊との感應を自ら体得すれば、どうして眼前の日常生活に於て、天国や極樂浄土がないことがあるか。そこで自らの真気を充実させることによつて、一切を改善し、一切を解脱させることができるのである。心は一切の善を生じ、善は一切の福を生じ、禍と福がおとずれてくるところの機は、影の形に寄り添うように、これらはみな因果の感應によるものである。

(七十二) 命を立てる (註一) ことの大切なことに於ては、歴代の賢人や哲人は皆方便をもつて説いている。ただ命は自分によつて立て、福は自分によつて造るだけであり、善をなせば吉祥が降り、不善をなせばわざわいが降る。善であればこれが得られ、不善であればこれを失なうのである。

禍と福とは常に移り変つて、これを変えるところのキープポイントは、人であつて天にはないということであらわしているのである。

これに着手するところの工夫は、自ら自分自身の欠点を改め、隠れている病根を取り除くことにある。それには大死一番して生れかわる決心を以て改心し、功德を積み重ねていけば、自から俗塵を超越し、定まった運命から抜け出すことも難しくはないのである。

しかし普通の人は、世俗の縁に縛られ、境遇にとらわれていて、最初の一念の動きが、正しいか、否かを管理することができず、また客観的情勢の誘惑にも抵抗する力がなく、試練に耐えられず、自ら主張することができず、運命の支配にまかせ、これを前世から已に定ま<sup>す</sup>まっていることであるとして、不平不満を言っているのである。

どうして真の造物主（神や仏）が人をもてあそび、多くの人を困らせるようなことがあるのか。それとも自らつくつた罪業を、自ら解きほぐすことができないのであろうか。世間におけるすべてのものは同じではない。得と失（得たり失つ

たり)、榮と枯(榮えたり衰えたり)、寿と夭(長命と短命)(註)貧と富(貧窮と富貴)などは、もともと人の思うとおりにはないのである。すべての福田(福を生み出すところの田畑や田地)は、心から離れずそれこそ心の中にあるのである。

もしよく自分にあるものを求めれば、天から賦与された良貴(本来からの貴いもの)は、聖人も凡人もみな同じである。どうして異るところがあろうか。しかも同一の時機においても、成就するものは自おのずから成就し、敗退はいたする者は自みづから敗退し、同一の境遇に於ても、楽しむ者は自ら楽しみ、苦しむ者は自ら苦しんでいるのである。

又心は道慈に向っていても、足が苦海に陥り、たとえ身は宝の山に入っているながら、何ら得るところなく、空手にして、山から降りてくるのである。その実一切の境遇はすべてが心より生じてくる、その種子を植えるものは、自らこれを培養し、枯れるものは、自ら培養しない故に自ら枯れ、傾くものは自らくつがえり、結局は自業自得である。それをどうしてこれを運命のせいにかこつけること

ができようか。

(註) 孟子に「天寿心を貳つにせず、身を修めて以てこれを俟つ、命を立てるゆえんなり」とある。詳細は「陰徳を積む」を参照。

(七十二) 道を修めるものにとって、貴ぶべきことは、徳を立て、善を積み、自ら命を立て、己自身の欲望や妄念に打ち克つて仁(道)に従い、いつまでも怨みを持たないことである。そこで道を修める者の真の境地は、内にあつて外にはなく、隠(隠れたところ)にあつて顕(顕れたところ)にはなく、己自身の中にあつて、天にはないということがわかるのである。

そこで見えないうところ、聞えないところの無形の隠れているところにおいて、吾が心に恥じることなくして、はじめて見えたり聞えたりするところにおいて、人々に対して恥じることがないのである。

発願のときの願力を充たし、実践を重んじ、随時随所に心を尽し、時々刻々に感応するのである。もし心が外において上帝(神)を求めれば、天と人は二つに

分れて、ついには合一することができないのである。ここに於いて心すなわち道であり、人すなわち神であり、天人てんじん（神人しんじん）合一して、すべて感應しないことはないのである。

最も恐れることは、善に向つていながら善を楽しむことを知らず、悪を避けていながら悪をたのみにしており、又仁（道）に従つていながら、常にそれを充実させることができず、過ちを次第に少くしようとしていながら、常にその源を清めることができず、又その名声のみを貪むさぼつて、善を広めることができず、その非を飾つて、その実を歩あゆむことができないのである。これらのことは常に身にひきあてて反省し、慎まなければならぬのである。

（七十三）太上老君（老子）が言うには、今の天下の人は、みな是非にまどい、利害りがいにくらまされ世間の人はみな病氣にかかつていながら、誰一人として自覚することがないのである。

おもうに君子は法律よりも、天理（道心）に負そむくことを畏おそれるのである。

菩薩は結果よりもその原因を重んじるのである。

それは最初において、僅かでも食いちがいがあれば、後にはそれは大きな違いになり、利害得失の差は一般の尺度では、到底はかり知ることができないのである。

易経は、君子の学問で凶を避けて、吉におもむくのであり、そこにはもとより自らの心を修める道があるのである。道を修めることを捨てて、利欲におもむき、正道を避けて邪道に赴くのが凡夫であり、彼等の眼中には利欲以外は何ものものもないのである。これを人知によって巧みにはかればはかるほど、益々道を失うことになる。それはたとえ日常における一つの想念や、一つの行動や、たった一人の事業であつても、本人の一生を全部左右することになるのである。又それが一個人だけに止まらず多くの人や組織・団体にも影響を与えることがわかるのである。その原因を追求してみると、それはいぜん純粹なる真心と、徳業の如何にあるだけである。また天理の良知（註）と自然の法則は同一の軌道から出ているので、これに順がうものは昌え、これに逆うものは亡びる。人を益する者はその結果、

人と我われの双方を益することになり、人を害する者は結局人と我の双方を害することになる。

そこで善悪の定義については皆知っているが、しかし迷っている者は、その時機がきても自覚せず、道に逆さかってこれを行い、理にそむいてこれを修めているのである。

後天的の私心による身勝手な知識や妄想は、すべてが無用で役に立たず、そこで後になって始めて無駄なエネルギーを消耗したことを後悔しても間に合わないのである。人心には悪賢わるがしこく、陰險いんげんなたくらみがあり、一瞬のうちに心変しころがわりして、あてにはならないが、しかし如来（仏）はその一般人民の心中をすべてお見透しである。

神明の照すところ、世情人心の多くの虚偽きよぎや妄心を以て吉を求め凶を避けるところの、あらゆるはかりごとなどすべてが明白である。

（註）孟子に「学ばずして能くするものは、良能なり、慮おもんばからずしてこれを知るものは、良知なり、孩提がひて（子供）の童といえども、其の親を愛せざるはなし。其

の長（目上の人）を敬するを知らざるは無し、親に親しむは仁也。長を敬うは義なり、他無し、これを天下に達する也」。

（七十四）昔の人は「治ちに居て乱を忘れず」。〔平和な安泰した世の中に於て、常に乱をおそれ、危険をはばかり、慎んで怠ることがないようにすることである〕それには必ず太和たいわの二字を守ったのである。いまの人は末世に直面しているのに、多くが自らの心を味くろまし、蔽おほっている。たとえ憂うれいや懼おそれに苦しんでも、これより解脱することを知らず、隣あわれむべきことであり、又聖人や仏の悲しむところでもある。

修行の功は、にわかには成就させることは難しいのである。人を濟け万物を利することは、もともと無理してやることではないが、しかし一日に一善を積み重ねて久しくなれば、この善の本性が充実して大円満となり、坦然たんぜん（静寂せいじやく）で、不動心の境地に至り、阻さへるものがなくなるのである。

すべて念を起し、心に発し、言語に出して、これを行い。ただ他人に益ぎがあり

さえすれば、人と我の双方に益するのである。有益な言行や感応は、やった方がやらないより勝っている。多くやった方が少なくやるより勝っている。真にやった方が仮にやったより勝っている。すべて自分ができることは、事情の許すかぎり、これを実行し、自暴自棄に陥ち入ることなく、又その機縁を失うことのないようにするのである。これが自分自身の解脱と世の中の災劫をなくす上での最も近道であり、それは全くその人に在るので、神気が充実して、これらが明らかにするのであり、本来このようであればならないのである。

もし私個人の見解やけがれた知識を以て、人を濟け万物を利することを、愚かな行為と見なすのは、それこそ自身が聰明にして愚かなたぐいである。心ある人はこれを悟って自らを励まし、今日為すべきことを、明日に延ばすことなく、今の時期に為すべきことを、後に延ばしてはならないのである。

(七十五) 上帝(神)は人びとの心の中にある。能く心中の上帝を味まさなければ、真の主宰者はつねに存在している。これが真理であり、これが大道である。

人生の不幸は道を聞くチャンスに恵まれないことである。又たとえ道を聞いても、これを修めなければ幸福にして不幸のようなものである。戒慎恐懼（恐れ慎しむ）は修道に励むゆえんである。過ちを少なくし、善に移るのは徳を養うゆえんであり、ただ禍を転じて福となすだけでなく、また縁にしたがつて人心を正し、災劫を化してこそ立派になることができるのである。

要するに、興るか亡びるか、禍か福かの機は、すべてが善と不善にほかならないのである。それは個人がそうであり、家庭がそうであり、社会国家もまたそのとおりである。

（七十六）宇宙の有と無の現象は、虚と実のはたらきを離れることなく、世俗の苦と樂のそのもとは因果にはかならないのである。ただ実が満ちれば還らず（註一）、虚が極まれば自から還る（註二）だけである。そこで修道の重要なキーポイントと、身心の主宰はすべてここにある。故に善因を広めることができれば、過去、現在、未来にわたるその結果も移り変わるのである。

瓜の種を蒔けば瓜がなり、豆の種を蒔けば豆がなるというたとえは、ただ因果応報の道理を明らかにしただけである。

先祖からのよくない因縁いんげんを変えるか、解消するかということについてここでは触れていないのである。

おもうに有と無、虚と実の間に於て、自然のはかりには、いささかのくゆるもなく、因より果に移り変る際に於て、悪が亡び善が興るか、又その悪が解消かいしょうされることも、当然可能なことである。

したがって修道の人が、神仏より福を賜わり、寿命を延のばしてもらおうと思えば、必ず神仏の慈悲の心を守り、その場に応じた功德くどくを行えば、心身の主宰は世俗より解脱して救われるのであり、全ては内より外に達し、己自身を推してそれを他人に及ぼせば、自おのずから心中の快樂を得ることができるのである。

金銭というのは、心の外にあるもので、自分がこれを所有している時には、できるだけ人の幸わせの為に、これを使うべきである。守銭奴しゅせんぬのような俗人になつてはならないのである。いわんや栄枯盛衰のならわして、朝あしたに億万長者であつて

も、夕にはびた一文もなくなるにおいては尚更のことである。

この災劫の流れが起伏している際には、いずれも皆そうである。これらはみな自ら覚ることができないからである。お錢というものは、能く利用すれば表面的には去つても、隠では又入ってくるものである。もし惜しんでこれを握りしめて出さなければ、必ず大きな禍いを起すことになるのである。それは過去の事例にも少くないのである。どうしてこの機会に乗じて、世の為人の為になすことをなさないのであるか。

(註) 黄帝の内経にいう「五臟満ちて実ならず、六腑実ちて満たず」と五臟は内に五行(木火土金水)の氣を含む。そこで満つるといへども実ならず。六腑とは胃・膀胱・大腸・小腸・三焦などで、みな実物を存して、しかも満たない。満つれば新陳代謝の化する力を失して病氣になるのである。人心も妄念や欲望が積み積って、化する力を失えば、ストレスが溜って病氣になるのである。故に実(後天の人の妄心や欲望の汚れたかたまり)が満ちると先天清空の府に還ることはできないのである。

(七十七) 昔より真人というのは、普通の人はずべて悟りを開いた仙人や仏の尊称であると思つてゐるが、その実このような狭い意味ではないのである。いわゆる真人というのは、普通の人とは違つてゐるのである。普通の人はずべて自分を称して人といつてゐるが、しかし、その行為たるや、人としての道を尽してゐないのである。

この人というのは、一般大衆の中から、身を立てたが、いぜんその人としての道を尽すことができず、それでは人と称することはできないのである。必ずや、その人が世にあれば一切すべてを世の為、人の為になることを以て本となし、その内に修め、外に行を立てることを問わず、すべてが人の模範となり、五倫八徳の道を極め尽すのである。これが人であり、称賛すべき真人というのである。

(七十八) 昔より神の道が教えを設けてゐるのは、法律を補足するゆえんである。法律は時には窮することもあるが、道によつて化する力は、有形無形を問わず、

すべて人心を感化し、その知らず知らずの間に、感化の力を發揮して、よくない風習を改めることができるのである。

そこで神の道を説く者は、決して神を重んじてはならず、人の道を重んずるのである。神に偏重するものは、心中で福を求めようとして、迷信におち入るのである。

おもうに神は本来聰明正直にして、人に禍と福を与えることはできない。そこで禍と福というものは自らがこれを招くだけである。神はその道を推進して、人に善をなすことを教え、人に法を守ることを教えて、また五倫八徳を以て人を感化することを重んじ、各人が立派な人になることを望んでいるのである。各人の人格が完全となることによって、社会には温和で善良の気が充滿することになり、奸悪・窃盗・邪悪・淫乱などの悪行はなくなり、搾取や苛酷な税金の取り立てや、弱肉強食等はなく、社会は内面と外観共に整然として秩序があり、乱臣賊子なく、国に叛き民を害うなどのこともなく、無為にして治まり太平の時代となるのである。道によって感化する力は何と大きいことではなかるうか。もし神を敬

い、拝み、神に偏かたよつて、人倫の教化の道をおろそかにすれば、世俗の人から迷信のそしりを受けることになるのである。

(七十九) 一般世間の人々は真の道を明らかにせず、ただ世俗のけがれに染つて、迷い、其の本を捨ててその末すえを求め、仮かりの一时的なものを以て永遠の真のものと見なし、その一时的な仮のもの、いつ迄たつても真に帰ることができず、それは大本がすでに失なわれているからである。そこでたとえ智慧や才能があつても、世の中のたすけにはならないだけでなく、また己自身を救うことさえもできないのである。その望むところを満たし、その欲ほつするところを充たすのは、悪因をつくることにほかならないのである。その極みに至つては、因果を積み重ね、過ちを繰り返して悪を成なし、罪障にしばられ、欲望におおわれ解脱することができず、ついには墮落してしまふのである。

おもうに自分自身の主宰者しゅざいしやが、その靈れいを失なえば、多くの悪魔がむらがり集つて来るのであり、そうすれば争むさい貪むさることが無益なだけでなく、ただ神前に礼拝

することのみを以て、事足れりとなすのは愚の極みである。

この道理をよく悟れば、神の道を修め励むには、多くの言葉を語っているが、重んじるところのものは、いぜんとして真実の功候こうこうにあつて、道を昌さかんにし、世の中を浄化するところの基もととするのである。

有形の道の基は、もともと道院・紅卍字会にあり、無形の道の基は、ただ一心にあるだけである。故に世の中の救済に志すものは、必ず行動を正し、徳の模範を立て、心を尽して、功徳を打ち立てるのである。

(八十) 心を修める上での真の工夫は、平時には覺るところがないようである。一度試練しとんにあうと、不平不満の心が起るのは、真の知慧や反省はんせいが足りないのか、氣質かたぎの偏りが除かれぬのか、それとも内候と外候うちこう（内候とは内の心の修練を積み、外候とは外に功徳を積むこと）が純粹じゆんじゆんではなく、また矜躁きんそう偏急へんきゆうが害をなしているのであらうか。それは実は長い間の習性によって、その心が蔽おほわれてしまい、世俗の知識が第二の天性となっており、これが己自身を誤まり、人を害すること

になるが、その過失がどこにあるのかということを知らないのである。

最もよい方法は、度量を広くしてすべてのものを恕し受け入れ、これを長期間にわたって持続すれば、その効果は自から宏まるのである。自からの小我（肉体の我）の仮の一时的な相を、空とみなすことができれば、他人の自分に対する評価によって、一喜一憂することなく、ただ自分の良心に対して恥じることがなければ、それでいいのである。そこで外部からの高い、低いの評価や優劣によってどうして自分の本心を動揺させることがあろうか。

たとえば自分の一身が前に困窮していても現在では万事順調に行き、他人が以前には傲慢であつても、現在では謙虚となるので、どうして他人が真に自分を敬つたり、軽蔑したりしても、問題にする必要があるか。

世情の軽薄な評価など一笑にも値いしないので、そこですべてを受け入れる大きな度量を以て一切を空とするのである。これが自らを養うところの要点である。世俗に於て人と接触するようになれば、性格的な摩擦というのは、もともと免がれ難いのである。能く人を責める心を以て、自分自身を責め、己自身を恕す心

を以て、人を恕せば、則ち無形の心靈はその光と輝きを増し、これが恕（人をゆるすこと）の道の最も大事なものである。自分が欲しないことを人に施してはならない。自分が欲し求めるものを先に人に施したか否かを自問自答すべきである。修める者は必ずこれを実行して、大きな度量を以てすべてのものを受け入れ、恕すところの工夫をすれば、胸中は天空濶達にして、魚は躍り、鳶は飛ぶにまかせ、円機活発にして最高の樂しみを味わうことができるのである。

（八十一）人の天性は皆同じではなく、悟りの境地もみな異っている。これらことは同時に語ることはできないのである。神仏は其の人によって教えを施し、縁にしたがつて覺りに導き、その人によって、高い、低い、深い、浅いなどは、初めから一定の基準はないのである。そこでただ人の知慧や悟りを啓き、その心によって体得させるだけである。

かの田畑の稲は白蛆という害虫を生じ、その稲じたいを食い荒すのである。河の水はぶよという害虫を生じ、水を腐らしてしまうのである。故に欲というのは、

心から生じてきて心を害し傷いたなうのである。

君子が自から慎しんしみ、自ら勉めるのに、多くの言語があり、人身が世俗に対処するにも、千変万化せんべんして複雑ふくざで極まりないが、しかし言語や事情の如何を問わず、身を慎んで心を治めることにほかならないのである。

心とは本来虚にして、物に応じても跡形あとがたがなく、この心を操とればここに存し、この心を失えばなくなってしまう、その心の本体は虚空静寂こくうせいじやくにして、いぜんありのままである。物が来ればこれを写うつしこれに応じ、物が去ればもとの空に返り、跡形あとがたを留めず本身は常に明らかである。一身は世俗に処し、千変万化に應じて遂には天下のことに感通かんつうし、虚にして物に滞とどおることがないのである。

ただ実修の方法については、ほかでもなく二つある。一つはおおいかぶさっているものを努つとめて取り除き、次第に本来の明德めい徳（虚空）に復かえるのである。又一つには本来の良よ（良知良能）を充実させ、これをさまざまに復かえるのである。この二つはこれである。これは又邪を防ぎて誠まことを存するにも通じるのである。この二つはこれを修めるにも難むづかしいと易やさしいとがあり、効果を収めるにもそれぞれ速いと遅いの差

があり、要はみな悟りの境地により、その天性に頼り、めいめいがその修行を達成させるのである。道に高低深淺があるというのは、道にそれがあるのではなくて、修める者の心境によって自からが高低深淺の差がでてくるのである。そこで智者は智とみ、仁者は仁とみて、智をあらわし、仁をあらわすのは、その人や見方によるだけである。

(八十二) 「積善せきぜんの家に余慶あり」(善根を積み重ねた家には、必ず子々孫々にまで及ぼす恩恵おんゑがある)があり、善根を積み重ねるところの積むとは、この積むこととが厚ければ厚い程、後世にまでその名声を残すことになる。この積むという字は誰でもが理解し易いのである。そこで物事はだんだんと積み重ねていつて成就するのであり、すべての事をなすのにただ僥倖きやうこうを求めるのは持たもむに足らないのである。いわゆる堅実に一步一步と踏みしめて行けば、ついには最高の境地に到達するのである。

そこで善を積まなければ、以て名声を残すことができず、悪を積まなければ身

を滅すようなことにはならないのである。憤りを発して食を忘れるという奮発の志のない者には、公明正大なる明智明德がなく、綿々として持続することのできない者には、輝かしい功勞を成し遂げることはできないのである。

おもうに学は積まなければ通じることとはできず、芸は積まなければ精通することとはできず、徳は積まなければ厚くならず、功は積まなければ崇くならないのである。そこで聖人、仏、賢人、哲人たちが抜群の功を打ち立て、後世にまでその名声を留めていない者は、誰一人としていないのである。

身を修める者は、この積むという一字を明らかにし、日常の生活に於てこの修業を詳細に点検し、たとえ一時一刻、一言一動たりともみな修めることの本来の主旨にもとづくべきであり、自ら修めるということを積み重ねて篤くすれば、善を積むことができるのである。もし積むことが持続し、功が深くなれば、本性が円満になり、心霊が明らかにになり、その智慧はすべて一切に通じるようになり、無理にしようとしなくても、自から中庸の道に合するのである。しかしこの積むという字は推すという字と関連して、これを同時に進めそれによつて内功と外行

が一方に偏かたよることがないのである。

推すの字の意味は更に明白である。それは幼児を推して幼児とし、老人を推して老人とし、この自らの心を推して、これを相手に加えるのは、これを相手の立場に立って推し広めるだけである。この故に欲望を少くして、淡泊を以て自分の身を守るのは、自分の分限を推してその分を守り、困窮の人を救うには、その人が衣食に苦しんでいるので、相手の立場に立ってこれを推して衣類や食物を施し、誠を推して相手に対するものは、誠意を推して相手に交わるといい、更に自らの慈いっくしみを推し広めるものは、母親の子供に対する慈愛の心を推し広めるのである。そこでこれを積むということは、自らの心中に於て積み重ねることであり、これを推すということは相手の立場に立って、この誠と慈悲を他人に推し広めるのである。世間のすべて一切のことは、この誠と慈愛の心にほかならないのである。

孟子は「恩恵を推し広めて行けば、天下を保つことができ、この恩恵を相手に推し広めなければ、妻子でさえもこれを保つことができず離れて行くのである」

といつている。

昔の人が大いに今の人より優れているゆえんは、ただなすところを相手の立場に立って誠と慈悲の心を推し広めただけである。

(八十三) 子を愛する心を推して以て姪めいを愛し、女むすめを愛する心を推して以て嫁を愛せば、人倫の道に逆らうことなく、常に家庭の平安を保つことができる。これを推し広めて他人に及ぼせば、その道理は至極簡単である。ただ善く他人に推し及ぼすことが、できるか否いなかにかかっているだけである。もし他人に推し及ぼしても、これらを積み重ねることができなければ、充実させることはできないのである。これを推して他に及ぼし、またこれを積み重ねることは、道慈のはてしない徳業とくぎょうであり、天性も無限に化育されて行き、みな「身心ちんしんの中」を体得することのできるのである。修める者がこれを悟り、これを体得すれば机上の空論にはおち入らないのである。

もし好いことを話し、好いことを行い、財があれば財を尽し、財がなければ力

を尽し、力がなければ心を尽せば、どうして積み重ねることができないと言えようか。またどうして他人に推し及ぼすことができないと言えようか。実際に修める者は、一言半句を耳にすれば、其の究極を明きらかにすることが、できると言うのは虚言ではないのである。

(八十四) 世の中の人、健康を喜び、病気を嫌い、生を愛して死を憎む、これは本来人情の常である。少しでも手足に疾病があれば、体全体が不安であり、いわんや内臓の重い病状においてはなおさらのことである。

そこでこの苦しみから逃れようとすれば、先にその原因を明らかにするのである。その積み重なってくるのは漸次(だんだんと)であり、その起ってくるのは突発的である。もし欲を積み重ねていけば損なわれ、損なわれることを積み重ねていけば衰える。身体はたとえ如何に強健であっても、内外(精神面と肉体面)両面から攻められれば、天寿を全うすることのできるものは少ないのである。健康な時には日に日に体を痛めつけていることには、気がつかず、老衰の後に長寿

を願つても、それは不可能である。それと同様に、修行の功が純粹でなく、永年の悪い習性を改めることができなければ、又道に対してもその眞実を實踐することはできないのである。たとえ仁（道）を慕つていても、その徳を広めなければ、光陰矢の如くその歳月は過ぎ去つて行き、死期が迫つて来て後悔しても、もう間に合わないのである。ただ吉か、凶か、禍か、福かの浅薄な考えのみにとらわれて、思うようにいかないときは、天を恨み、神をとがめているだけで、いぜん自ら徹底的に反省自覚しないだけである。

おもうに心を修め道を研めるものは多いが、その願いを実践し、これを全うするものは少ないのである。たとえ同一の善をなしても、その結果は必ずしもいいとは限らないのである。それはその時に於て、自分の本分を尽しても中途半端であり、それによつて益を受けることが少なく、又業障によつてますます魔障が多くなり、たとえ善をなそうとしてもいろいろな障碍にあつて思うようにいかないのである。同一の悪をなしても、その結果は必ずしもみんな悪いとは限らないのである。

それなのに今ここに災難が多く起っているのは、決して心を修め、道を行って  
いる者が招いたものではないのである。

天は人に背かないが、人は多く天に負っている。道は人を誤らないが、人が常  
に道を誤っているのである。すべて一切の盛と衰、安全と危険、盈（みちる）と  
虚（欠ける）、成（成就）と欠（欠陥）の中で、はたして安泰を維持しようと思え  
ば、至誠、至道、至仁、至性を全うしなければならぬのである。（以下省略）

（八十五）末世を救おうとすれば、道（心）を修めることから始めるべきである。  
一心がすべての主人公となって、すべて一切の行いの基となるのである。そこで  
万は一より始まり、末は本より始まり、顕らかなものは微かなものより始まり、  
結果は原因より始まるのである。原因のない結果があり得ないように、結果のな  
い原因もあり得ないのである。そこで一切の因果（原因と結果）は心にほかなら  
ないのである。これがあればそれがあり（原因があれば結果がある）、またこれが  
生ずればそれが生じ（原因が生ずれば結果が生じる）、これがなければそれがなく

(原因がなければ結果がない)、これが滅びればそれが滅び(原因が滅びれば結果が滅びる)、そこでこの心中の一念の差(違い)がやがては千里の違ちがいとなる。初めに慎しんしむことは容易であるが、終りをまっとうすることは難がたしいのである。

故にその始めを言うものは、必ずその終りを会あ得とくし、その近きを言うものは、必ずその遠きを知り、それは本を窮きうめその始めを求めるのである。そこでこの両端について言うならば、靈れい(明らか)と昧まい(暗い)の分界(さかい)、また人と禽獸(とりやけもの)が異なっているところはほとんど希まれである(註一)そこでその妄念に克かつのが人であり、聖人となるところの始まりでもあり、その妄念をほしいままにすることが、禽獸と等ひとしくなるのである。又その過失を改め改心するのが、仏となるところの始まりである。

これを最初、原因の段階で慎しんしむ、これを最初の微かな段階で見分け、この心をくらまさないのが、明の始まりであり、又己自身の誠まことを篤あつくするのが、その修道の始まりであり、吾の発願ほつがんを実践するのが功の始まりであり、これを善く推して他人に及ぼすのが行動の始まりである。

根本的な靈智、境遇、こうこう功候の造詣ぞうけいのこの三つは、人それぞれ同じではないけれども、ただその天性の善よしに基づいて、その仁愛の徳を広め、その人としての天理を全まっくうすることが修道の目的である。

(八十六)「諸悪を作なすことなく、衆善(多くの善)を奉行ぶぎやうする」ということは、三才の兒童も知っているが、八十才の老人でも行うことができない。これによつても、これを実行するということは、容易ではないということがわかるのである。たとえ深遠な道理をいかに論じてみても、実行がともなわず、また座ぶとんが破れるほど正座しても、自らのよくない氣質を改めることができなければ、結局身心に対して何のプラスがあらうか。

「庸徳(日常の平凡な行い)これを行い、庸言(日常の平凡な言葉)これを謹つつしむ」日常の生活における篤実あつじ実践の中にこそ、はじめて自己本来の真我があらわれるのである。自己の内にある天国を広げ、人間の極楽浄土をつくるのも、すべてが真我の自覚に根ざしているのである。故に聖人や哲人が大いに人にすぐれて

いるところは、その偉大なる功績にあるのではなくて、本性（真我）を尽した、正しい実践行動にあるのである。

たとえ僅かに善い心やすぐれた力量をもつていても、善い言葉や善い行いに対して、充分にこれを發揮することができなければ、いぜん当面の幸福となるとこの機縁を失なうことになるのである。

（八十七） 眞実の修道とは、ただ守ることと為すことだけである。守るべきところは必ず守り、為すべきことは当然為すだけである。

それを世の中の人は、為してはならないことを為し、為すべきことを為さないのは、自らを誤りまた世間を誤らせる無形の過失や罪惡になることを知らないのである。

おもうに自分の本分として為すべきところ、つとめとして為し得ることを、時機や因縁が為すようにまかしているのに、またどうして楽しんで為さないのであろうか。一たび行えば善氣を充たすことができ、一生の喜びである。

もし自らの一念が仁機（慈善の機）を阻止すれば、真源をさえぎることになる。かの虚名、私利私欲のまどいをもって、世俗の知識や物欲に染まり、そのために善行を放棄するという結果になり、ついには為そうとしてもできず、いたずらに心霊が悔いを残すだけである。すべて孝悌、忠信、礼儀、廉恥、慈悲、善縁は、当然守るべきなのに守らず、当然為すべきなのに為さない者は、自分ではこれはいかにみなすであろうか、自分が人を見るのは、あたかも人が自分を見ているよいうなものであり、人をもって人を見てもこのようである。ましてや神が人を見れば、すべてはお見通しであり、ひとしお哀れをもよおすのではなからうか。

（八十八）修道する人が、その功夫こうふを用いるには、自分自身の功こうと罪ざいを省察かえりみることを以て、先決となすべきである。多忙ひまと閑ひま、動うごと静しずを問わず、いつでも自分の内に問い正し、随時にかえりみて、喜びが来た時には、すぐ自らを点検し、怒りが来た時にもすぐ点検し、矜おごりが来た時もすぐ覺さとり、躁いらだちが起った時にもすぐ覺さとれば、多くの煩惱を少なくし、多くの苦痛を取り除き、多くの過失を免れ、多く

の功德を積むことができるのである。

もし覚照（自覚の光）の遮ぎるものがなければ、益を受けることきわまりないのであり、これを推し広めて悟ることができれば、世俗のあらゆる得失や恩と怨みは、本来無いものであり（すべては心によって作り出されたもので客観的に存在するものではないのである）、人生に於ける、その人の品格・徳性・福分と実際の成果の大小は、ただその心霊の明らかであるか、昧（くら）まれているかによるだけである。

（八十九）道慈には定義があり、信仰はその根本を立て、修行は実功をなし、すべては誠と恒（続けること）が中心となるのである。末世の私利私欲をほしきままにし、続々と偽りやごまかしをなしているものであり、すべての権謀術数や、巧妙なたくらみは、たとえ一時をあざむいても、いつまでもあざむくことはできないのであり、たとえ一人を欺くことはできても、すべての人を欺くことはできないのであり、たとえ一事を欺くことができても、多くの事を欺くことはできない

のである。

自から度を越えてその聰明を頼りにするものは、その聰明によつて事を誤るの  
で最も聰明ではないのであり、ただその業わざの障碍を深くするだけである。

道を修めることは難しいことではなく、ただ誠の力を持續することだけが難し  
いのである。信の一字、誠の一念も、もしこれを持續することができなければ、  
たとえ一般の事業や技術や芸術であつても、なお成果を収めることは難しいので  
ある。いわんや修道を深くきわめるに於ては尚更のことである。またたとえ信じ  
ても、これを明らかにしないものは迷わされるのであり、またたとえ誠であつて  
もそれが一時的で、持續することのできないものは、多くが中途にして挫折して  
しまうのであり、さらに半信半疑、誠と偽いつはりりが相半ばしているものに於ては尚更  
のことである。

そこで邪を防いで妄心を取り除くのが、その誠を存するゆえんであり、私利私  
欲を洗い流して徳を積むことが、その信を打ち立てるゆえんである。

道をきわめ修道に励むことは、結局は、はかない人生に於て空しく歳月を過す

ことよりははずつと勝っている。また慈を明らかにし、篤く行うことは、当然無益な消耗をくり返すよりずつと優れているのである。ただいい加減に、自からを欺けば（妄念妄想によって本来の良知良能を味まし欺くこと）、言行はただのうわべを飾るだけの装飾品に過ぎないのである。

そこで表面だけの虚栄を以て人に応待すれば、近きと遠いの仲を問わず、その関係は自から疎遠となってくるのである。

世間の聡明才智にすぐれている者の境遇と結果が、多く純朴にして実直なる者に到底及ばないのである。それは長くこれを継続して大きくなつたのであり、またその基本の誠と信を積み重ねて来た差ちがいによるのである。

（九十）天下の事はどうして自分の思うとおりにいくであらうか。末世の劫げきに苦しんでいる時にあたり、心得こころええるべき処世の道は、欲望が多ければ多いほどこれを実現させることは難しい。また妄念は自分自身の心をかき擾みだすことになる。勝かち気きな人は必ず敗れ、また名誉にとらわれるものは多くが敗れ、そしられたり、ほ

められたり、繁栄と恥辱も最後には消失してしまふものであり、このようにすべ  
てのことは、またたく間に空となり、百年の歲月もつかの間である。世の中の人の  
憎しみや怨み、つらみなどの因をいつまでも根にもつて、解消することができ  
ず、その苦しみをますます深くしているのである。

あるいはその禍をつくりだしているものは、多くて数えあげることにはできない  
のである。先哲の言にも「犯して校せず」（人が自分を侮辱しても、怨みを抱くこ  
とはない）「触れて怒らず」（汚されても怒らない）とは、人を責める心をもつて  
己自身を責め、己自身を恕す心をもつて人を恕するのである。思うようにならない  
境遇や、思うようにならない事あるいは意に逆らうような場合にも、寛容に堪え  
忍び、これらのことを心に留めなければ、自然に雲散霧消してしまふのである。  
この中にこそ無限の楽しみがあり、凡庸な者の理解できるところではないのであ  
る。ましてや双方とも譲り合えば通じない道はなく、双方とも恕し合えば解けな  
いわけばかりはなく、双方ともに悔いれば釈けない怨はなく、双方とも化すれば  
消えない禍はないのである。心を平にし気を和し、真相を看破すれば、どうして

是非善悪や恩と怨うらみが、自分の心境をかき擾みだすようなことがあるか。最も恐れることは、一時の感情で事に対応するのも難行苦行にとらわれて、解脱することができないゆえんである。

(九十一) 感應篇という書物では、いわゆる善人ぜんじんというのは、人々はみなこれを敬まい、天道もまた佑たすけ、福祿もこれにしたがい、諸々の邪はこれより遠ざかり、神靈はこれを護まもるといつている。またいうには、心で善の念を起せば、たとえ善を為さなくても、吉祥の神がこれにしたがうといっている。

そこで感應の道理は氣機の相通じるところ、善の氣は善の機を引っぱり、清氣は清機を引っぱり、これらは期せずしてそうなるということを知らなければならぬ。その果報むくいにいたっては速いと遅いとの違いはあるけれども、終りには寸分すんぶんもくるいがないということは一体誰がこれを主つかどっているのであろうか？それはただ人が自からこれを呼びよせているだけである。

すべて純粹に心を修めている者は徳とくの基もとの厚い人はその心こころを存して(註一)、正

しい者、善念の充ちている者はいつでも護法神のご加護を得られるのである。故に誠を存して自らを欺くことがなければ、吉祥神が常に側におられるのである。もし邪念がひとたび芽ばえれば、魄魔はくまがこれに乗じてくる。この一念が移り変わる間に、その感通は間髪を容れず速やかなのである。故に善く修める者は必ずその独りを慎しむのである。生命の中に於て最大の転換点は、自からの過失を悔い改めることであり、徹底的に自から新たに生れ変わることにある。そうすれば、たとえ福はまだ至らないとはいえ、禍はすでに遠ざかるのである。

(註一) 心を存す

孟子に「その心を存し、性を養うは、天に事つかえるゆえんなり」とある。この心を存すとは心を存し、養うの意味である。

(九十二) もし身心の克治こくち（私欲に勝ち邪念を治める）を実際に功夫くふうすることに ついて論じれば、過ちを知って過ちを悔い、過ちを改めて過ちを少くするに越したことはないのである。過ちを知るのは自らの心を昧くらさないことにあり、過ちを

悔いるのは自らが能く新たに成り、過ちを改めるのは善に移るのであり、過ちを少くするものはやがて過ちがなくなるのである。しかし、にわかには過ちを知ると言っても、それは容易なことではない。明らかな一身の過ちはおろそかにしやすく、目に見えない心の過ちは察し難いのである。

北極真經の警思の箴しんでは、「非を知り、過ちを知る者は、昔より幾人いたであらうか」と言っている。また孔子は「吾いまだ能くその過ちを見て内に自ら訟せめるものを見ず」といい、また呂東萊は「人は能く己に克つところから工夫をなして、はじめて朝から晩まで、頭のとつぺんから足の指先まで過失のないところがないということを知るのである。故に聖人は過ちが多く、賢人は過ちが少なく、愚おろか者は過ちがない」というのである。

覚まごり、照し、戦々恐々として身を修めるには、独りしか知らない処の想念の世に於て、妄念を戒め慎しみ、自らを厳しく点検するのである。自ら正しいと思つて、これに安やすんじ、自ら過ちがないと見なしている者は愚か者である。

一般の人の共通の弊害は、ただ過ちを認めても己自身を責めることはないの

ある。人は聖人や賢人でない以上、誰が過ちがないということがあろうかというが、この言葉の意味は他人には寛大であれということであり、これを以て自身身を恕す<sup>ゆる</sup>ことに用いてはならないのである。ましてや過ちは聖人や賢人といえども免かれることができないのに、しかも彼らが聖人や賢人となることができたのは、能くその過ちを悔い改めたからである。

(九十三)人が最も貴ぶべきものは生命である。この生命の最高の宝ものは神(後天の精・氣・神の神を指す)である。そこで身体の安泰は、神氣を充実させることにある。神と氣が会<sup>あ</sup>ひ、氣と神が合すれば、心が定まり身体が健全となる。もしいたずらに身体を養うことだけを求めて、その本心を昧<sup>くら</sup>まし、昧りに貪<sup>むさほ</sup>つて貪欲となれば、自然に嗜欲が芽ばえ、また疾病が生じて体を損傷し、また損傷がひどくなれば死亡に至るのである(これは心が定まらず、貪欲が生じて本心を昧ませば、それが身体に甚大なる影響を与えることを指している)たとえ薬や栄養によつて物質的に補充をしても、過度の疲労や、損傷から起る病いを助けることは

難しいのである。

いわゆる怒りやいらだちを絶つて以て肝気を養い、妄念をやめて心気を養い、飲食を節して胃気を養い、言語を謹んで肺気を養い、情欲を淡くして腎気を養い、更に識神によつて元神を乱すことなく、客氣（私利私欲の氣）を以て元気を損うことがないのは、みな精神と肉体を共に養うのである。

故に善を楽しむのは、心を養うゆえんであり、義を集める（註一）のは、氣を養うゆえんであり、敬（註二）を主とするのは、神を養うゆえんであり、誠を存するのは、本性を養うゆえんである。仁（道）を宏めて以て天地万物を養い、道を昌にして以て天下万民を養うのである。そこで道を修めるものは、これらを養い充実させることにある。まさに誠を存し、敬を主とし、義を集め善を楽しむことを以て、修道の實際の功夫とすべきである。

（註一）孟子の「吾れ善くわが浩然の氣を養う」の一章に直養して害なうことなれば至大至剛の氣は天地の間に充ち塞がるというこれは「集義の生ずるところ」によるとある。これは心中の妄念妄想に打ち克つてこれらを一掃し、真氣を充実

させ、これを怠るおこたことなく、助けることなくこれを長期間にわたつて継続していけば、無形のうちに何か綿々として充実してくる感じがする。これが集義の生ずるところである。

(註二) 敬とは主しゅ一無適いつむてきなりとある。これは一を主として、他に心が散失しないことである。また妄念を起さないように工夫することが敬である。

(九十四) 末世の風潮や、俗世間の浅薄な考え方によれば、多くが道を修め慈を行ふことを馬鹿げたことであり、忠実でまじめな人をおろか者であるともみなしている。そこで本分を守り、天命に安やすんじ貪むさぼらずいい加減にしない者、また忠恕(己のまことを尽し、人に思いやりのあること)を以て人に接し、怨うらまずとがめない者で、また正直せいちよく率直で心にわけへだてのない人、また過ちを認め、己自身の妄念や欲望に打ち克ち、損失や打撃に堪え、これを受け入れる者、篤実でまじめで、己個人の利害損得を捨てて、公に奉ずる者、同情して人を助け、心から善を好む者。そして以上これらの者を見てみるのに、世間的に見れば聰明ではなく、馬鹿

げた行為であり、そこで彼らを利害をかえりみないところの愚か者と笑ってはい  
るが、内心ではこれらの者を好まないのではなくて、ただ自分がしないだけであ  
る。

試みに問うが、これらのことが馬鹿げたことだと言うなら、一体どこから眞実  
の人材を見い出すことができるであろうか。そうなると過去の聖人や賢人や哲人  
や義士は、すべてが馬鹿者だということになるのではなからうか。

(九十五) 意念を誠にすることは、自ら修める上で第一に重要なことであり、心  
を正す(註一)とところの実際の功夫くふうでもある。心はもともと無心であり、その意  
念がたび動いて有心となる。そこでいわゆる善もなく、悪もないのが心の本体  
であり、善があり悪があるのは、そこに意念が動くからである。深遠にして幽微かすか  
なところ、すなわち自分だけが知っている境地において、その本源をきわめた  
し、自らを欺くことのないように意念を誠にし、自らを恕ゆるさず、自らを味くちまさず、  
自らをなおざりにせず、自らひるまず、人事を尽くして天命を待ち、仰いで天に

恥じることなく、俯して地に恥<sup>は</sup>じること<sup>が</sup>ないようにするのである。自分が人に對して誠実であれば、自分の良心に對しても責任を負うことになり、また天を欺かないのは、自分の心を欺かないということになり、人を欺かないのは、自からを欺かないということになるのである。

自分自身の是非善惡、功と罪、品格、徳性、言行及び長所、短所に対しては、厳しく謹んで自分を正視し、自分を吟味し、自分をはつきり見きわめ、自分から理解することができて、これらを他に及ぼし拡充するのである。故に身に反<sup>かえり</sup>みて誠であれば、これより大きな楽しみはないのである。

もし自分の誠実さが欠けていれば、始めは自らの欠点や過失を故意に見逃<sup>がし</sup>し、自らを欺き、それによって自らを誤り、自らを損うことになるのである。

そこですべて自分の心中の不快や乱れ、精神の錯乱、異常な状態、これらは大半<sup>はん</sup>が自ら欺くところの意念や想念によって起こってくるのであり、それらはすべて自らを反省することを知らないからである。

したがって責任逃れや、過失をおおい隠すことによつて、長所をひけらかし、

短所をかくし、過失を飾り、間違いをおおい隠し、非を以て是となし、その虚偽が發覺すれば、その罪禍はいよいよ深刻となり、その罪を子々孫々に残すことになるのである。諺に罪は自ら欺くことより大きな罪はないのであり、害は心をつくらすことよりはなほだしい害はないのである。

(註) 大学に「身を修めるものは、心を正し、心を正すものは、意を誠にする」とある。

(九十六) 世間の善男善女が、觀世音菩薩を信仰するゆえんは、その觀世音の宏大な誓願せいがんによつて一般衆生が濟すくわれるからであり、それは不可思議の妙徳をそなえており、その音声に感應して苦しみを救うのである。苦惱している一般の衆生が、一心に觀世音の名を称とよえれば、即刻その音声に感應し、みなその苦しみから解脱げだつすることができるのである。故に觀世音の廣大なる靈感は、誰もが知っており、代々記録にも多く残されているのである。

しかし、世間の一般衆生は極めて多数であり、末世の天災や人の禍わざわいが頻繁に起

っているのに、観世音がただ御一人<sup>ごいちにん</sup>だけでは、同時に多数の人を救うことがどうしてできるであろうか。

昔の賢人がこれに答えていうには、水面に映ったお月様と鏡のように澄みきつた天をもつてこれをたとえている、すべて鏡のように澄みきつた水面と天があるところ、そこには天の光やお月様の影が映るのである。青空も明月も、もともと一つである。いわゆる「千江に水あれば千江に月あり」(数多くの大河には、数多くの月が映る)、「万里に雲なくして万里に天あり」(雲によって天がおおわれているので、その雲が一扫されれば万里にわたつて青空の天があらわれてくる)。たとえ十五夜の名月が輝いていても、水面が濁り、澄み切った天が雲におおわれているば、月のあかりをうつすことができないのである。観世音やもろもろの菩薩は、みな一般の衆生を済度<sup>すくは</sup>とてころの心情をもつて、縁にしたがつて顕れ<sup>あは</sup>れ感応することきわまりないのである。

ただ問題は、その心中における一念のきざしが善ならず、真ならず、また誠意がなく、平常利己的で私心が多くわがままで身勝手な人、また心根<sup>こころね</sup>が不正で邪悪

な人達は、たとえ一時であつても感應することができず、救われないのであり、ややもすれば仏や菩薩が自分に感應しないことを恨み、疑っているのである。あにはからんや、一般の衆生が善根の功德によつて誠が感通し、過去の悪い因縁を解消し、苦惱から救われた人は、どれだけいるかわからないのである。

いわんや末世の天災や人の禍に直面し、人事では到底その力が及ばず、觀世音のご加護によつて救われる者は、実は衆生の心の中の觀世音によつて感應し救助濟度されるのである。本性を明らかにすることができれば、それがすなわち仏性であり、そこで心は仏の心と同じであることが貴いのである。また本来人々がそなえているところの本性の徳、本来の真心によつて良知はあきらかとなり、天理がはたらき、至誠息むことなく、感じて遂に天地に感應するのである。故に一たび覚悟れば、永遠に迷いや苦しみから解放されるのである。

いわゆる「度いは自から度わず、度いは吾が心よりす」や「諸悪を作すことなく、衆善（多くの善）を奉行（実行）する」というのは、すべて自らのこの心によつてたよるのである。もし自分において慈悲の行いがなければ、いたずらに苦難から

のがれようと祈っても、天地の間にどうしてそのような感応の道理があるであろうか、決してありえないのである。

(九十七) 実際の修道は、簡単にして行ないやすく、それは日常の修行と練磨からくるのである。そこで不正は邪であり、邪でないものは正である、不善は悪であり悪でないのは善である、覺さとらなければ迷いであり迷いがなければ覺りである、真でなければ妄であり妄でなければ真である、一方が来れば一方が退き、一方があれば一方がなくなり、正と邪、善と悪、覺さとりと迷い、真と妄、などの両者の間には、どっちつかずの中間の存在はありえないのである。もし良くもなく悪くもないという中間的存在をもって自ら任じているか、あるいは悪いことをしたことがないので、さらに修める必要はないと思っているのは、これらはみないかけんに生きることが習性となっており、これらのことを改めなければ自ら身を誤るだけである。

もし真に徹底して反省して、身口意の三業（身に行なったこと、口で言ったこ

と、意念で思ったこと）などが眼に見えぬ無形の業をつくり、その報いを受けるのである。このようにみると、有形と無形の過失は非常に多くて数えきれないであろう。ただそれぞれに軽いと重い之差や、隠れていると顕れているの違いがあるだけである。

故に純粹に心を修める者は、根本からこの真と妄をはつきり見分け「操れば存し捨れば亡ぶ」（註二）この孟子の言は、心を堅持して失はないようにすればここに存在し、心を捨てて顧みなければ亡びてなくなってしまうということを意味しているのである。このいましめをおそれ慎しみ、独りのところを点検し、誰も知らない自分自身の想念の世界に於て、厳しく謹しみ、一たび動いてこれを覚り、一たび覺つてこれを切り換えれば、過失や悪念を転換して福德を修めることができ、また煩惱を転換して菩提「悟りの境地」に達することができ、識神（註二）を転換して智慧となし、凡人より転換して聖人になることができるのである。すべて淨く明らかで、光り輝やき、覺つているところの真心の本体に徹するだけである。

(註一)「苟もその養を得れば、物として長ぜざるは無く。苟くも其の養を失えば、物として消えざるは無し。孔子曰く、操れば則ち存し、捨つれば則ち亡なう。出入時無く、その郷を知る莫し、これ心の謂いか」(すべての物事は、これを養えば成長しないものは無く、またこれを養わなければ消滅してしまうのである。孔子が言うには、操れば存し、捨つれば亡び、時々刻々出たり入ったりして、そしてその居所を知ることができないとは、これは心のことを言うのではなからうか)。

(註二)人身には六根(目、耳、鼻、舌、身、意)があるので六識(六根の積極的なはたらきを指す)があるので、六塵(眼で見て色塵となり耳で聞いて声塵となり、鼻でかいで香塵となり、舌でなめて味塵となり、身に染まって触塵となり、意に執着して法塵)となる。以上の六塵は衆生の真性を汚染し、そのために衆生が煩惱を起こすことになり、また六根はつねに六塵によってかき乱されて心がくらまされることになる。

(九十八) 世の中の人はいくつもの人が、福を求めるといふ願いを抱いていながら、福を招くところの道をおろそかにしている。たとえ前世から積み重ねて来た福運があるとしても、ただ福を受けて安楽に暮らすことばかりに気をとられて、福を惜しむことを知らず、また福の種を植えなければ、福運が尽きてしまえば、苦しみが訪れてくるのである。その最もひどいものは、利益のために義(道)にそむき、金銭や財産に執着し、吝嗇が習性となり、貪欲で足ることを知らないのである。

仏教ではこのように吝嗇や貪欲で、福運の種をまかないものは、それが尽きればやがて餓鬼道の報いを受けることになるのである。

また思うままに金銭を浪費する者は、終にはその福運を絶たれ、その恩恵も消えることになる。そこで後悔しても間にあわないのである。また貪って足ること知らない者は、故人も言っているように「多く蔵すれば、必ず厚く亡ぶ」(多く蔵える者は、必ず厚く亡んでしまう)。「満つれば損を招く、謙は益を受け、満は損を招く」(謙虚な人はその益を受け、傲慢な人は損失を受ける)を知らないのではあ

る。

本来か天命の本性は、これを人に賦与し、性徳のそなわるところ、本来の善も同じくそこにそなわっており、そこで本性に従って行えば、どうして善でないということがあろうか。天性の根源から、善の境地に至るまで、その性分を克尽すのが、福運を増すゆえんである。また元気を培養することが、福德の気を持続させるゆえんでもある。およそ末世の衆生で徳を修め福を積もうとしない者は、みな識神によつて攪乱され、世俗のよくない風習に習いそまり、私利私欲をもつてこれをおおい隠している。

たとえ善を行うことができて、これを為さず、福を積むことができて、これを拒み、無形の罪業やそのエネルギーが、その本人の徳を崇び、善をなすことを阻止しているようである。このように自主的に修めるべき主体性を失った以上、自ら善福の道を塞いでしまうことになるのである。

時には本性の真が明らかにあらわれ、天理（道心）がにわかに見られるけれども、一瞬にしてこの一念が移り変って、迷いや不明におおわれてしまい、本来の

虚靈の光を全く失ってしまい、終には苦惱の地獄におち入ることになるのである。要するに立命りつめいとは、自ら修めることにあり、すべて一切は心によってつくられ、心が一切の善を生じ、善が一切の福を生じるのである。故に自ら多くの福を求めるのは、自分の心にあるだけである。

(九十九) いわゆる仁義礼智、良知良能は、本来生れて来た時からの固有のものである。孝悌忠信、庸言庸行（日常生活におけるふだんの言行）は、もともと人としての本分である。それは平易にして日常ふだんの道より、篤実に実践行動に移し、それによって自らみづかその徳を積むのである。すべてを反省し欲望や妄念にうち克かつて自らの良心を欺かないという工夫を積み重ねることが、この身を立て、己自身を修めるところの根本の主体である。そこで基本の所在は、一が正しければ皆正しいのであり、一が不正であれば皆不正である（註）ということをし、せつに知らなければならぬ。このところにおいては、少しも不純な雑物の介入を許さないのである。それは善意と悪念、正しい自覚よこしほと邪よこしまな思い、誠いっわりと偽いつわり、真心まごころと妄

心、天理と人欲、正義と利欲などを問わず、すべて自分自身をいつわり欺いてはならないのである。以上述べた善意と悪念などは、この二つの分岐点を厳しく見分けてこれを守り、どうして欲望を認めて天理とみなし、利欲によつて正義を害し、誠と偽を見分けることができなくなるか。一般の人は真心と妄心の見分けがつかないのであり、また意念の発するところ、善もあれば不善もあり、人はたとえ知らなくとも、自分自身は皆わかつているのである。そこで修める人は、今のこの場所において最善の努力を尽すべきである。若し自分の意念が正しい善念であれば、誠心誠意この善念を拡大すべきであり、若し意念が悪念であれば、徹底的にこの悪念を退けるべきである。思うに善とは本来これを行うべきであり、それは福を求めんが為に行うのではないのである。悪とは本来行うべきではないのであり、それは禍を免れんが為に行わないのではないのである。あくまでも本心の良知からでてきたものであり、虚中の実である真意を充たすものであり、これを純誠なる真の修道と謂うのである。たとえ明知より出た善であっても、これを篤実に実行しなければ、折角の明知も悪となるのであり、それは

情欲に引きずられ、世俗の識心によつて惑まどわされ、自己の私心や利己心に蔽かわれ  
るので、それによつて自己の眞の主体を失つてしまうのである。

(註)

一例として一念が正しければ、言行すべてが、正しく、一念が不正であれば、  
言行はみな不正である。





## 序一

天下有道則治、無道則亂、治亂興衰之關鍵、在於「道」之一字也。古人說「道在近、不在遠、道在內、不在外」道在心中不必遠求、其心即是水之源、木之本、也是世界和平之根本。這些聖人·賢人言行錄、是修身養性、必讀之書。回顧道院、紅卍字會設立以來、已歷八十餘載·其間聖人·賢人之言行教化、不勝枚舉。王瀾觀會長、將其中精華選了九十九條刊成專輯、並經根本誠乾先生譯成日文、古人說「提燈籠行夜路、不怕黑暗、賴明燈」書是照亮黑暗的明燈、修人就是明燈之體也、特供讀者參考。

陳福坡 謹識

## 序二

聖神仙佛降靈濁世。以道勗修。以慈勵行。數十年來。訓文之多。難以紀述。凡有關修人之身心性命。氣質變化。功過修省。言行踐履。習染滌除。塵俗牽累。理欲之辨。義利之別。信迷之判。要皆順機指迷。隨緣導覺。縷述解釋。剴切詳盡。以期衆修出迷登清。脫幻全真。度己度人而化世也。每逢訓文初頒。無不爭相閱讀。欣賞聖神之文章。感嘆仙佛之慈悲。但不知對於悲憫之呼喚。曾有幾人自醒。幾人自覺。誰知自悟。誰知自愧耶。况視而不覩。聽而不聞。閱時已成過去。訓文置諸高閣。偶爾憶及關於某事之啓示。又不知年月日時。無從查對。今爲輔助潛修起見。將有關砥礪修程之精粹訓語。摘要錄出。繕印成冊。置之案頭。當作座右銘。以便早晚翻閱。而資警惕以自勵也。茲僅摘要百條。不免掛一漏萬。凡有志修持者。若能切實服膺一條或數條。亦足以啓發德性。約束身心。堅恒毅力。奉法守則。遵行本分之常道。葆其固有之性靈。若是。則此冊之繕印。或能少有補益。當不至完全落空也。是爲序。

程子四箴。曾子五箴。附錄篇末。以供參修。

歲次壬子年孟春（公曆一九七二年三月）吉旦

王 瀾 觀 謹 識

## 聖人·賢人·言行錄

1 自怨等於自欺。君子所以不敢自怨。恐流於自欺也。罪莫大於自欺。禍莫甚於心死。我欲欺人。卽先自欺其心。我欲欺神。卽先自蔽其神。世俗只見有形生死。而不知無形生死。身之生死爲有形。心之生死爲無形。蓋心之生死。雖無形而難知。惟言行所發。則有迹而易見。

2 持身處世。及人生各方面道理。聰明人懂得的多。愚樸人理解的少。但歸諸切身實行。懂的多不如做的多。懂的少而認真實做。隨時皆有成就。這無關才華各位。只重真心實行。信願所具。隨緣不變。多是誠懇敦厚而篤道的人。

3 曉得個人長處。更要承認自己短處。看見他人錯誤。同時發現本身過失。擇善而從。不善而改的話。原非空談。卽使自持力甚強的人。亦須借鏡返照。虛心接受他人之提撕警覺。藉可補救個人的缺欠與弱點。

4 天地無私。聖佛有靈。空禱上帝賜福。或臨時急抱佛脚。同屬無益。而趨於迷信。只要存善念。行善事。廣善緣。讀好書。說好話。做好人。自能逢凶化吉。遇難成祥。聖佛的恩德。不是教人逃避倖免。却能導佳修渡過難關。並非許人毫無風險。却能引善信穩

達彼岸。修人自問。對上帝意旨。是否順承無違。自然可以知道。能否真實接受聖佛的慈悲了。

5 困辱非憂。取困辱爲憂。榮利非樂。忘榮利爲樂。是故君子窮亦樂。遇亦樂。所樂非窮通也。

6 聞毀易怒。怒則嗔恨時起。聞譽易喜。喜則矜滿自溢。此常人通病。因不知修養爲何物。故日趨放肆而不覺。真誠修人則反是。聞譽思愧。愧則謙冲內蘊。聞毀思警。警則惕勵弗遑。固有修養工夫。外來之毀譽喜怒。非但不足動於中。適足作爲砥礪修程之資。

7 欲增福命。須培福田。願收福果。先種福因。德爲善之成就。福爲德之產品。是知福德相依。福善互根也。

8 無道心者不能行真慈。無慈心者亦不能成真道。

9 真修之士。並無祈求之心。只知善培根莖之所在。廣播仁慈之種子。不求收穫而收穫自來。不祈平安而平安自至。語云積善可以致祥。種德可以受福。豈虛語哉。

10 和致祥而德致福。此理之常者。可徵於過去。可信於今後也。心靈天秤。好自檢點。立

善救苦。不外一念。及時因機。大償修願。未之來者。雖不可預卜。而方寸福田。善緣所湊。自能作主者。幸勿自忽也。修道不外一心。禍福之機亦不外一心也。

11 修以誠爲根本。誠以無私心爲表現。有私心不能謂之誠。無誠根本不能談到自度吾心。

12 修道展慈不遺餘力。尚應刻刻警惕。念念自省。施予有無望報之思。功德有無矜滿之意。防微杜漸。以期此心一誠不二。

13 濁世修道。首先要把握住自己的心。卽內在的主宰。不可感受外來的影響。人榮之不足爲喜。人辱之不足爲怒。榮辱喜怒根本不可操於他人。應全繫於自心之覺照。勿自外生成之大我。勿自絕內在之上帝。

14 修持之要點。在於人所不知而已獨知之處。(自己的心)真修者對於此處。必須時時省存。刻刻留意。嚴辨理欲。認清善惡。一時一刻不能放鬆。自己審察自己心靈。自己悟求自己過愆。溫養日久。物欲漸消。理智漸明。修程日進矣。

15 處災劫煩仍、化弭孔殷之際。應發熱誠赤心。以赴挽救。不管他人覺悟與否。只求吾心之覺悟。不問他人功行如何。只勵個人之功行。不問他人如何對待我。只求我能明

道慈。勵功行。盡吾天職。宏吾慈量。一切皆從方寸以內來用工夫。半點不存功過心。此時浩然之氣內蘊。發而即成度人化世之功。雖不言自度。而身心皆得度矣。

16 俗云、道魔相爭。究竟道與魔爭。抑魔與道爭。道在何處。魔居何所。應知道魔均發源於心。心爲道之源頭。亦爲魔之居所。一念正心即是道。一念邪心即是魔。修者修此心也。此心能省察克治。改過遷善。心即是道。魔亦順服歸化。此卽道勝魔也。若此心放蕩邪惡。背道而馳。心卽是魔。道亦潛消。此卽魔勝道也。心是善惡之出發點。亦是道魔之分界線。可不凜然警悟乎。

17 神事獎功。有形論事。無形論心。原有深意與苦心。獎功所以勸善。勸善所以勵修。勵修所以明道。明道纔能宏慈。宏慈纔能免因。免因纔能證果。凡有獎功之處。不可泛泛視之。應體仙佛苦心。努力向善研修。以期明道宏慈。自能達到免因證果也。

18 堅誠中正者。培其固有之靈。固其先天之炁。宏其慈悲之志。償其救渡之願。魔惑所不能動。艱苦所不能搖。

19 堅誠修養毅力功行者。知而必行。行而必勇。勿蹈却善不行。知惡不改之譏。必至聞善而行之如爭。自然福壽可保。聞惡而改之如讎。自然災禍可離。所以功莫大於去惡。

而爲善。過莫大於去善而爲惡。德莫高於博愛。仁莫高於溥利。行莫高於實踐。修莫高於堅恒。養莫高於克己。

20 誠之一字。貫乎天地萬物。至誠不息卽是道。一誠不二。卽成己成物化人化世之真功。心正身修。必本於誠。日用倫常。應事接物。三綱五常。五倫八德。必本於誠。忠恕之道。克己之修。必本於誠。應於己。感於人。通於神。有感斯應。不誠無物。一人不誠。害於一家。十人百人不誠。害於社會國家。勢必相率爲僞。欺妄相競。舉世滔滔。永無寧日矣。

21 福兮禍所倚。禍兮福折伏。惟視人之自修惕悟爲若何耳。苟得福而不惜。因驕而自滿。是福之來。實爲禍端。若因禍而警悟。惕勵以修持。未有不轉禍爲福。化險爲夷者也。

22 心者先後天之總樞也。論後天氣質。心是一身之主宰。溯先天炁化。心是性靈之源。泉。心有所主。則動靜行止。攸往咸宜。應事處世。無不得當。心得乎養。則天人貫通。率性受命。展道宏慈。度人化世。無非一心爲樞紐耳。心爲人之大本。本立道生。衆凝神聚。萬事皆備。苦心不得養。而失其主宰。則毫釐千里。補救無術矣。

23 心能作佛。心作衆生。心作天堂。心作地獄。心空則一道清淨。心有則萬境縱橫。善因終值善緣。惡行難逃惡境。蹈雲霞而飲甘露。非他所授。臥烟燄而噉膿血。皆由自取。非天之所生。非地之所出。只在最初一念也。

24 禍福之道。根於正邪之念。善惡之行。善則得福。不善則禍臨。其禍福轉移之權。在人不在天。可知人生命運。雖有不齊。而禍福無不自己求之者也。

25 心爲虛體。可以言行見之。言爲心聲。行爲心跡。二者皆所以表達乎心之所得也。心有所得。乃發於言。克踐其言。乃見乎行。行而有益於人。有益於世。是謂功德。亦卽以己之德行而施於人之謂也。

26 作善降祥。行道有福。古人所云。不我欺也。但於遲速明暗之際。未加細參。或有不能了徹。甚或以善者不祥。惡者常存。此中真諦。仍必於真理中求之。必可豁然貫通矣。所以然者。天地之報施善人也。或報之以物質之阜厚。或報之以精神之愉快。或以人丁平安市報善人。或以後裔熾昌而酬福德。天之報施善人者如是。懲罰之於惡人者。亦在此等處見之也。惟有獎無懲者。表面觀察如是耳。實則獎懲之際。如影隨形。絲毫不爽。不過有遲早明暗之不同耳。

27 成見定見之別。成見不可有而定見不可無。成見乃對人而言。即指待人接物。涉世處事。要以謙和爲本。避免爭執。不可狃於己見。執於私意。而導致紛擾。以至於債事而樹敵。世俗成見之害。貽誤大矣。所以成見不可有也。定見乃對己而言。即指克己修省。濟人利物。要持以堅恒。勇往直前。竭力以赴。不可爲人言所感。環境所移。而游疑莫決。隨波逐浪。以致違仁背義。所以定見不可無也。一日三省。三月不違仁。當仁不讓。見義勇爲。非定見不爲功也。

28 修養工夫。全在吾心之內。覺悟、自責、懺悔、改過、爲善、去惡、扶危、濟困、皆發自赤誠之心。而表現真實之修養。亦卽化劫脫數。轉禍爲福之惟一途徑。不必求神問卜。邀福祈佑。若覺悟不醒於方寸。則禍患常見於目前。束手無策。追悔莫及。

29 存慈悲心。行慈悲事。人心爲化災之本。貪求無厭。明爭暗騙。人心爲造劫之原。大劫之起。在於一念。大劫之化。在於一心。居心存念。乃善惡根本所繫。亦禍福機關所伏。此中消息。關乎家庭與個人之安危。至爲重大。

30 修人多有怨恨自己無才無能。不能宣道辨道。因而氣餒掃興。遂忽於修道。而自暴自棄。此一錯覺。造成大誤。豈知修人以修道行道爲主。非必以能宣道辨道爲首要也。

蓋不能實心修道行道者。其宣道辨道。亦僅屬皮毛。心不能徹底。實以修道行道爲根本。以自己之心力誠恪爲準則。譬如作慈功。量吾之力。盡吾之心。不在數之多寡。謹言行。出言行事。順天理合人情。不可有絲毫損人利己之處。勤修悟。克己慎獨。自省自責。不可有絲毫自恕心。此皆自己才能所及者。何言無才無能。但不可以少有進功而矜。亦不可以爲久而無功而懈。因此中有功而未能自知者。候有忽然而覺者。無論境遇若何。應以堅恒毅力相持。未有不達成修之願望者也。

31 不練不坐。道將不峙。不修不守。道將永墜。道者乃宇宙間自然法則。良知良能乃人心自然法則。練、坐、修、守。是維道成道自然法則。練之以中。坐之以平。修之以正。守之以直。中、平、正、直。乃大道之自然法則。亦良知良能之自然法則也。修道應以中、平、正、直、爲準繩。善何以歸。惡何以除。中、平、正、直、也。奉法守則。卽奉守中、平、正、直、也。聖神仙佛。明自然法則。以爲修練。不敢少有變通。所以成其所成也。

32 過者雖大賢所不免。其所以與常人不同者。惟其能改也。見善如不及。見不善如探湯。日事修悟。不敢少有放恣。此其所以爲大賢也。常人不悟修行道理。所以肆意以爲語言。縱恣以爲妄行。種種罪行。積成惡因累累。如能頓悟懺悔。改過力善。卽可化

惡因爲善行。惟知而不悔不改者。惡因乃乘除乎善功。善功一盡。孽報隨之。可憐亦復可憫。善修善悟者。自能悟覺而努勉修行也。

33 心君本清靜。性靈原光明。只因私慾滿腔。火燄熾張。以致性靈化爲灰燼。心者失去主宰。故善修之士。必有以修。必有以修。修其清靜也。以定心君。守其虛空也。以固性靈。修於何所。守於何地。一言以蔽之。仍不外一心也。各教主及聖神仙佛。千言萬語。諄諄教誨。純爲挽救人心。以弭浩劫而立言也。如修心、煉心、明心、洗心、清心。等等妙傳。不勝枚舉。究竟此修、煉、明、洗、清。應如何以完成之。必以修坐習靜爲開端。持以堅恒弘毅之力。循序漸進。必可達成此不可思議之成果也。

34 真經曰、「度不自度。度自吾心。」至於吾心。如何度之。應加探討。此心包括一切後天積染習性。物欲牽惹。佛云。照見五蘊皆空。（五蘊亦稱五陰。乃色、受、想、行、識、五法。衆生由此五法。集積而成身。故謂之五蘊。一曰色蘊。謂有形之物質。即眼、耳、鼻、舌、身、意、六根也。亦稱六識。二曰受蘊。謂六識領受六塵之作用也。六塵卽色、聲、香、味、觸、法。三曰想蘊。謂識應於六塵而起想像之作也。四曰行蘊。謂意識思想諸塵。造作善惡諸行之作用也。五曰識蘊。謂對境而照。分別各事務之心識也。）乃能度一切苦厄。五蘊之苦厄。得以滅度。吾心之積染習性。物

欲牽惹。卽一掃而空。此謂度之吾心。若不能自度吾心。佛法如何偉大。如何善喻。皆無所助於修行。既知度吾心之所以然。應當行其所以然。若知而不行。是謂空談。空談何補。我心中一切苦厄。不能自度。而想度人。豈不是捨本逐末。自欺欺人嗎。

35 人人都有一身債。命債氣債。兒女債。疾病殘缺債。一生辛苦勞碌無了期。大劫將來。其慘酷更非想像所能及。狂流熔焰陷溺其中。立化灰燼。勿待去了不了之時。方悔未曾實修。到了欲留難留一刻。將誰與謀。呼天不應。叩地無援。無法可施。豈不哀哉。大劫未來之時。如能夢醒而覺。天堂地獄。尚可任吾選擇。慈航永遠存在。急速回頭。便是覺岸。淺近之言。望各有所警悟。努力度度度化。以期弭化劫數於有形無形之間。乃有度人自度之望也。

36 修人舉動云爲。關係重大。如果言行不符。說約一套。作的又是一套。此不獨個人淪落。對於道慈觀感度化。大有影響。在未求修的看來。講的道理。不過理論而已。並未照着講的道理去做。既失去觀感度化作用。同時授人指責的口實。對於整體院會社之前途。所關綦重。雖經咒不斷口誦。訓文時見獎勉。功過相衡。自然天秤上。大有分別。名爲修人。不可不警悟而勤加地焉。

37 修在一心。成在一心。心性光明即是佛。佛卽心之本體。能悟本體。何用他求。心外無處求佛。心外無處化解。心外無處得救。心外難除煩惱。心外難渡苦海。心外難登彼岸。若不識本心。雖學法深奧。仍屬無益。修人千萬。不知有幾人能放下屠刀。而識得本心者也。

38 志在修養者。首戒矜字。矜字能戒。則躁、偏、急、隨之而化。不能戒矜。則躁、偏、急、因之而生。平日過錯。以及大奸大惡。皆由矜、躁、偏、急、所造成。而矜字尤甚。矜則必躁、必偏、必急。事物失其平。人我成見生。道理味真義。在於自身修養。必受損害。在於事業。必生暗礁。在於家庭。必爲離心。在於社會。必爲孤立。在於朋友。必拒人於千里之外。在於自心。心無坦適之樂趣。至此地步。修養失據。其他成就的希望。更無可期矣。

39 綜觀人生。除非大徹大悟。立脫苦海者。無日不是人間地獄。擾擾攘攘。苦海波濤。翻滾滾。浮沉榮枯。轉眼成空。只留孽債。勿論富貴貧賤。士農工商。一生碌碌。無時不在痛苦之中。三寸無斷。皆成鏡花水月。貨利位名。妻財子祿。明知是假。而不能一時放下。捨不得假的。所以得不到真的。雖聖神仙佛。大放慈航。希望衆生同登。然是否能登。全在一心之悟覺。吾心不能懺悔改過。悟明大道真理。聖神仙佛亦難援手。

度不自度。度自吾心。吾心吾心。吾心將如何以救正而度之乎。

40 修人非不明道。只因不能衝破貪慾之囿。雖至悲喪哀悔之境。仍望把持剎那之主權。迨至無常到來。魂一離體。痛悔已遲。頓悟生前未能切實修行。可不哀哉。

41 有人意欲修行。不知從何處着手。既無權威地位。又無金錢勢力。道既不能修。慈亦無法辦。此種觀念。若非故意推諉。即是根本錯覺。豈不知我有我的本分。我在我的本分以內修道德道。已綽有餘裕。能孝慈。能仁義。能和睦。能誠信。能感格。能運化。能實行。能渡弱。這都是人人本分以內的寶藏。足夠我選擇應用。並且不是金錢權勢。所能交換得來的。我爲甚麼不在我自己本分富有的天地裡。實事求是的去修行。而羨慕他人的金錢權勢。豈不知金錢權勢。多數誘人入罪惡之門。試觀古往今來。有金錢勢力者。有幾人能以真誠修行呢。我若捨棄自己本分富有的良田寶藏。而羨慕誘人犯罪的幻境。那真正是一個十足的大傻瓜了。

42 善有多種。惡有多端。所以賞善罰惡之理。有時顛倒難以理解。而怨天公之報應有差。此世人僅以耳目爲主宰之判斷也。天公默察。惟從心源隱微處。燭照絲毫。所以真假是非奸忠虛實。畢現而無所逃遁。若按先賢經驗。詳爲分析。凡事存心利人。爲

善爲公。存心利己。爲私爲惡。同一利字。利人爲公。利己爲私。而分善惡賞罰。同一功行。因存心各異。所以獎勵不同。諸如外表恭順。內心奸詐。或享大名。而實不符。以及陽善陰惡等。必有奇禍。無過咎。橫被惡名。心田正。橫遭忤逆。子孫必昌。難忍處能忍。難捨處能捨。福報特厚。若財勢足者。立德必易。易而不爲。是甘自暴棄。貧且賤者。作福必難。難而能爲。是可貴也。可見根本上無所謂難易。全在一心肯不肯真誠修行而已。

43 試觀人之一生。有富貴一生者。有貧賤一生者。有先富後貧者。有先賤後貴者。其中窮通壽夭。顛沛流離。浮沉榮枯。種種遭遇。統謂之曰命運。今試追求命運自何而來。何以人人不同。命運來自定數。因定數而產生命運。今再問定數是誰定之。曰自定之也。佛家明白指出。今生受前生作。今生作來生受。今生受者是果。前生作者是因。今生作者是因。來生受者是果。所以因因果果。循環不息。每人降生時。都帶來自己的定數表。註明因果定數之一生命運。可知命運。非由仙佛作主。是自己所造成的定數也。雖然定數。有定亦無定。但憑善惡增減。以爲轉移。若今生能作大善大德。即可化除前世惡因。而增福祿。由困窮而轉順境。若今生作惡累累。前生多少善因。亦乘除

盡淨。由富貴而沉落苦海。俗云、多行善事。莫問前程。所以君子能造福命也。修道之士。因道功慈行之日進。因果之當於今世了結者。必能無形化於果報之機。此理甚明。多數人皆能知之。不過不能切實修行而已。

44 多數智識階層。常有自發正念。猛然着鞭。乃曲高和寡。不協于俗。或爲勢屈。或被譏笑。行有不得。遂不克自持。此各地善根。爲大流沖激。不能堅立砥柱。而泯于濁濤者。不知凡幾。故求修研道。自淑化人。必以誠明堅恆爲功。必除矜躁偏急之失。而得乎信、解、行、證之真。則功深候轉。造詣與理智俱增。心志與妙境漸合。大本大源。只要確立其基。然後隨緣盡分。隨處踐行。不至因多變之塵幻。而自亂真中也。否則向上有心。覺證無力。稍有理解。轉而自疑。置一廢百。顧此失彼。此修道者如牛毛。明道者如麟角。證造成道者。更罕觀矣。只因不得其門而入。進程中時有所阻。且養其一指。而失其肩臂。愛其一身。而忘却人類。根本不明。因果起伏。一有障惑。鮮不自廢耳。

45 天之生人。畀以智慧才財。豈爲各各之自私。倘精神妄耗。才財妄用。一失其正。姑不論其後果如何。即塵身轉瞬間。有耳失其聰。有目失其明。手足心思。皆失自主。至身

外所有。更難自保。及噬臍已晚。方悔自負天地生成。錯過良好時機。然自墮自墜者。孰挽之。孰救之。只恨才之自悞。財之傷德。是皆不明道。不向善。或中途改節。或作輟相參。自作自受也。可知塵俗浮沉。因業流轉。自造因果。若能悟因果之顯著。慎言之正軌。再進而覺念自生。自啓其慧。自醒其迷。道化慈功。作實際之建樹。乃能行健自強。進德修業于無疆也。

46 世間事物。有由于己者。有不由于己者。由于己者有義在。不由于己者有命在。君子進德修業。祇操其由于己者。不慮其不由于己者。蓋人生過程。如航海。如登山。中途之紛歧變遷。每易迷失。彷彿無舵之舟。無綱之網。但不應忘却吾進德修業之目的。而自懈前進之志。過程中雖有不齊之遭逢。或意外之挫折。皆所以鍛鍊磨礪。祇要主宰不失。認清正途。終必克服一切障阻。達到最後之安境。若迷于紛歧之路。若于引誘之象。其不半途自廢轉變初志者幾希矣。

47 富貴驕人。群知其非。勢位驕人。皆笑其矜。惟以才智學習。與修子功行。自生驕泰之念。立阻虛明之路。其害亦不減于財勢驕人也。此皆矜之爲害。多不自覺。最障化運。非潛心自檢。細密省察。實難拔除病根。世人好誇過去得意之作。大談其一己之長。

往往因自露其長。立形其短。道中言修。不尚空談。隨處虛心研悟。自加省察與印證。乃有益耳。否則泛論天不之事。不通事物之宜。其所修所行。最易爲世詬病。不獨有礙宣化之功。且易啓人指責與輕視也。

48 考史乘治亂之由。常基於人謀頃刻之臧否。究身世榮辱之別。每決於言行樞機之何如。君子戒慎恐懼。存養省察。卽屋漏袞影。獨勤獨知之處。亦同十目所視。十手指。凜天人之分。嚴理欲之辨。叩虛中之本然。明氣機之自然。誠意正心。時得安坦之樂。曲突徒薪。不失防微之要。下此者。雖焦頭爛額。幸得挽救。無償其損傷之已然。中下之人。但藉事實之警惕。小懲而大誡。不無補救轉移之可能。若迭經事實之教誨。及自取之懲罰。而仍私心自用。覆轍相循。是皆錮蔽已深。漸近於心死已。

49 彼浮慕淺嘗不求深解者。非修也。高談濶論不符實行者。非修也。見異思遷始勤終怠者。非修也。務末忘本趨假忘眞者。非修也。世之指修爲迷信。斥修爲迂濶。視修者不合時潮。譏修者退化落伍。要皆未深研于修。乃未知修之所以爲修也。

50 蓋心者神之府也。身之主也。統性情意識。運行四體百骸。具衆理而應萬事。大則德侔天地。小則志適心安。不外人人固有之本覺眞心耳。故濟難舒困。推己及人者。此

心也。忘我利他。同體慈悲者。此心也。然而心本至純。物慾雜之。心本至正。俗情染之。心本至坦。塵障阻之。心本至廣。習蔽塞之。凡後天人心妄動。皆自昧先天木靈。故鍊心以至無心。洗心以至清心。存心以至堅心。明心之前。必制心一處。正心之功。必自收放心。不動心始也。是治心爲道修之本。聖哲仙佛。舍此無以度人化世也。心生一切生。心滅一切滅。心君泰然。百體從命。一絕一切絕。一斷一切斷。本無自無。固有自有。又何塵障魔惑之味蔽乎。不過在塵之身。此理雖易明。此功則實難也。惟切實自治者。積久功深。靈光自照。覺照無遮。多一分善功。減一分惡業。充一分正氣。化一分厲氣。推此悟于一切。修身養心。聖學真詣。自能握其要。而探其本源矣。

51 破一切相易。破我相則難。破一切執易。破我執則難。故四相（我相人相衆生相壽者相）先以無我。四母（母意母必母固母我）終以母我。其意同。其教人之旨則深切也。

52 人生氣質不同。又爲習氣習性所囿。日在不平不和不純不正之變態中。迷而不覺。牢不可破。真誠修者。必須承認自己缺點。力求克治。以免常墮於氣質對閉之中。存養省察。剷除私心。不萌對人行不通之想。不行對心過不去之事。由內達外。生機隨時流露。性天日復。氣質日漸銷鎔矣。

53 眞誠修者。捨治心而外。別無捷徑。最怕方寸之中。常爲小我（私心）佔領。則大我（公義）無容足之地。若能除私心。卽全公心。故寡欲所以養心。慎獨所以正心。必滌慮乃能清心。必克己乃能修心。願由心發。功由心積。佛由心作。果由心證。人生最大悲哀。莫甚於陷溺其心。身被物牽。等於自被枷鎖。心爲形役。究屬何人馬牛。是應根絕害心之媒。掃清賊心之敵。由眞中默默處。保其赤子之心。誠篤眞實。以契命天心也。

54 君子所以異於人者。以其存心也。吾之心耳以度吾之身。不隨萬千之塵勞苦厄而昧蔽淪滅也。故自知者不尤人。知命者不怨天。自淨苦因。自拔苦根。但求了因。不應造因。又何至再增苦果。總之大道勗衆。修心是尙。心定無擾。心空無相。心平自靜。心澄自清。誠只是去僞。眞只是去妄。敬者不怠。悟者不迷。心安自然理得。心明自生覺照。本源朗徹。圓通無礙。故能不避苦而苦自遠。不慕樂而樂自在。無入而不自得。卽無往而不樂。是其樂乃彌足貴也。

55 荀子曰。聞之不若見之。見之不若知之。知之不若行之。學至於行之而已矣。倘知之而弗行。行之而弗篤。機緣錯過。時不再來。諺云。說得一尺。不如行得一寸。雖理論

精高。而實行不至。小我自囿。力乏感召。亦何補於世歟。質而言之。施與受可以相比。凡力之所及。心之所安。涵仁樂善。施者是福。若夫情非巧取。勢不得已。赧然獲助。受者實苦。試問願施乎。願受乎。最可怪者。明知是福。而拒其福。本有餘力。而失其機。吝于克己。反以讓入。自阻善緣。難充慈量。且宇宙無個我之世界。人生不能逃世而絕俗。舉凡取之於社會。用之於人群。各有應得之酬償。與應盡之分際。施受之間。在心靈之天秤上。可自檢其積存或虧欠。非他人所可洞悉。須知心靈之電波。無異上帝呼喚。性體之光覺。直同聖佛指南。意化心觀。此岸何殊彼岸。理通性適。生機卽是真機。方寸中自有樂地。化宇內無非慈光。只在順天然。盡當然。契乎自然而已。

56 塵身寄世等蜉蝣。剎那光陰逝水流。萬里長城同古玩。當年金谷已荒丘。吁嗟乎。人生不滿百。常懷千歲憂。黃梁夢裡幾回頭。是誰肯向死前休。自身罪孽。兒孫馬牛。何論得失。徒惹煩愁。那知劫變到末日。身外何物爲吾留。死到臨頭方知悔。貨利位名水上漚。痛恨平時妄取巧。呼天號地徒傷悲。回頭覺岸趁修日。莫待追悔時已遲。

57 凡爲道慈化渡。運其才施。法施、身施。盡其物力、精力、心力。一方而爲利他而支付。一方而卽爲己而儲存。有形無形。因果非虛。發揮人性無限之光輝。漸臻人道至高之

境界。況却輪急轉。風詭雲譎。道慈真機。修行實功。卽在此微秒之光陰。剎那無常之  
人生中。自得永恒不朽之成果也。

58 願得真諦。願造上乘者。不落休咎靈異之窠臼。藉醒衆人邀福祈佑之癡迷。此大道度  
修。較諸其他同而不同之處也。且智者自反。愚者外求。自愛者知恥。自治者除妄。不  
問禍福。惟檢身心。不論窮通。先定品格。人生一切成就與榮譽。皆以立命爲始基。是  
知無修不足以敦品。無品不足以言道。君子修道立德。不以窮困而改節。若勢位烜  
赫。而衾影愧怍。則吉凶悔吝之際。造次顛沛之中。依然把無柄。心無主。惶惑沉淪。  
終難自拔也。

59 若僅存自貴之心。私愛之念。縱使貴爲帝王。富有四海。亦不過暫寄權託而已。勢位  
富厚。過眼雲烟。名利奴役。性爲形遷。求完求美。患得患失。終此身處於大患之中。  
究竟爲我所有者。果何在耶。是以欲脫累身之患。須求修身之道。瞭澈人生之本義。  
幻身何至障真我。默認天命之安排。歷塵應全教劫功。勘破斯旨者。視後天一切所  
有。等於寄託看管。但能由吾作主時。可以憑心力善爲運用。益世自益。濟人自濟。宏  
善造福。樹德立命。實爲弭患脫苦。度一切劫難之妙訣捷法也。

60 須知救他。爲人道之應爾。被救乃人生之不幸。若夫世俗心情。既不願被救。亦不肯救人。或明知救他卽自救之道。而不能認真做去。充分爲之。此却網中芸芸者衆。其自謀自保者。將不知究竟何以得救耶。況慈悲濟實施。必有基本之動力。善功德行。足以了因而脫厄。更重在弭度解化之妙用。存乎天人之中。至於心靈之安泰。身家之佑護。皆由致福之道。自定載福之基也。

61 福之來也。積累非易。福之去也。疏漏未覺。故享福自應惜福。修福眞能造福。機緣之許我。境遇之助我。爲時皆暫。況末劫多變乎。當見心願頗篤者。實踐處功果未半。奮發有爲者。到手來做得幾分。且歷塵救劫之夙願。當機力行之全功。不於此生此日此機此時。一了百了。則轉瞬之頃。追悔莫及。此修子所當自懷者也。是故當仁不讓。乃能樂善不倦。盡己之誠。更必成人之美。輔德宏善。福命立增。福氣自充。最怕私意自限。並障阻他人可能之功行。爲咎爲過。不言自知。此修子所應切戒者也。

62 象齒、蚌珠、虎豹之皮。匹夫之璧。何以末世多忌。非汝之是敵。乃忌視皮與璧耳。古之言道者。虛己以遊世。翛然而往。侗然而來。物物而不物于物。又何累之有耶。人之困厄。各具數在。但多半皮與璧之牽縛耳。處今之世。果能善明于此。在不廢生計範

圍下。眞能爲團體道義犧牲。他人縱斥我迷信。笑我落後。而我已由眞實中。漸除皮  
璧之忌。亦未嘗非明哲之宜。况作善降祥。行道有福。古有明訓。豈欺我哉。

63 勸籌固爲方便之緣。然而神事主要觀念。則重眞修者。自剜其肉。自感其眞。化弭誠  
格。方具特殊力量。若在己顧慮吝惜。希得他力而成否事。是神事所不取也。總在盡  
我之眞誠。則隨緣相感。亦屬自然善機。乃不負吾道之特降也。反之。世俗成事。只重  
形式。不重原則。縱可成功。其有無天人之際。恐無感格轉移之力耳。

64 時會特殊。因緣不同。道與俗之間。孰重孰輕。孰念孰緩。有心人當不至以現實名利  
與希望。戰敗天人相通之慧機與覺路也。倘一心之中。得失利害。貪着希求。種種不  
寧。則不免主客易位。本末倒置。流浪生死而已。

65 凡學識地位才能資財相同者。而後果則多有不同。何哉。在君子則大宏德業。在小人  
則徒增塵苦。故此世此時。同一機緣。在修士則力道宏慈。出迷登清。在俗人則競名  
奪利。孽積禍從。是一地之中。而吉凶不齊。一門之內。而苦樂各殊。可知居安思危。  
君子惕勵弗違。非好爲是戒慎恐懼也。蓋道修在我。不進則退。後念一萌。先天立蔽。  
同一處境。同一理解。而實功所立。眞修所證。各存乎其人耳。

66 存忠恕心。作陰鷲事。抱平等觀。行方便法。神事因其人因其事。示以陰鷲之行。自不  
限于院會。亦非專爲院會設想。此神明之大公。亦解脫因系者。應有之心性實功耳。  
若以陰鷲之行。急切不易圓滿。果欲由院會代行其事。亦無不可。惟自身接觸與感  
通。仍不宜空空過去。且無量善願。無量善功。神事示人之自爲。不能與平凡愚誠作  
交易耳。卽捐輸院會。究竟不存絲毫。仍爲發心者之功行也。吾道勗修。不願以下乘  
說法。真理無雜。大公無執。務使明信者。不落平凡之叩拜耳。古諺云。聰明本是陰鷲  
助。陰鷲引入聰明路。不行陰鷲使聰明。聰明反被聰明誤。深願善修者。時誦此語。時  
存此念。在院會之外。行方便。擴仁機。以無形之陰鷲。作有形之解化是要。

67 歷來聖哲。明道立教。莫不以身是先。倘自身無實際表現之真。欲以言論著述。啓導  
他人。蓋亦憂憂乎其難已。窮鄉僻壤。孝子賢婦。自存其淳。自行其素。不求人知。不  
望天報。而其感動之力。足以通天地而化劣俗。在孝子賢婦。仍若無其事焉。嘗見誠  
樸謹訥之士。悃福無華。然其言行所出。共感化力遠非才智者。所能及其萬一。所以  
建樹與感格。必先具自力之確定。乃可廣收他力之相助。然而爲之於艱難。持之以弘  
毅。不似聰明是尙。而以盡心爲先。自力爲主。他力爲助。必如是乃得於有無之中。萬

緣促成。是內定之眞力善光。一得發越。則充實之誠感。自能運籌如願也。

68 行善作慈。應盡其在我。視爲本分之當然。隨遇隨緣。忘形無相。反是者。則外施救渡。內計人我。智者惟願善由己出。愚者亦欲善由我行。事非自主。卽敷衍情面。名不我歸。則旁觀袖手。以故社會雖多義舉。每尠實功。世人縱具善心。難了素願。要皆妄分彼此。着相自障。甚且情存勝負。矜心求逞。爲善而反結不善之因者。比比皆是。

69 純誠向善。無相黑礙。隨緣宏化。其功德成就。有不可思議者在焉。有其實不居其名。圓其功不存其相。後其身而身先。外其身而身存。不執自我以先人。人卽樂從而不厭。不私其身以亡道。自身雖去而道存。所謂爲而不恃。長而不宰。功成而不居。聖人終不爲大。故能成甚大。非以其無私耶。故能成其私。是中土最高哲理。亦道修無量化渡也。

70 三世因果之說。不僅勸勉衆生。實重在今世耳。故同時因果。必加注意。富前一言一事。均有因果互存。不勤耕耘。田畝歉收。不精研讀。考試落選。以及嗜好成癖。捐人自害。均多顯例。若至悲喪哀悔之際。輒歸咎前世因果。或怨嘆夙命。皆迷信之流。甘墮落者耳。最要者。則在不昧因果。凡事原始要終。推其原因。明其結局。善不積不足

以成名。惡不積不足以滅身。所以因果精義。惟在自作自受。自感自招。全屬本身問題。絕無迷信意味。對一般言之。則必畏果慎因。蓋上焉者審幾了因。次則明機以正因。不焉者必藉有象之警惕。小懲而大誡。論末世之趨勢。半屬人間地獄。證心靈之感應。豈無現前天堂。持一己之正充意志。可以改善一切。解脫一切。心生一切善。善生一切福。禍福轉移之機。形影相隨。皆因果之感應也。

71 立命之要。歷代賢哲。固多方便說法。亦惟命自我立。福自我造。作善降祥。作不善降殃。善則得之。不善則失之。顯示禍福無常。而轉移之權。在人不在天。其下手工夫。是在自攻本身缺點。拔除潛伏病根。以昨死今生之決心。遷善改過。累積功德。自不難超凡脫數。但常人在緣縛境囿之中。既不能照管乍動之意念。又無力抗拒情勢之誘惑。經不起考驗。作不得主張。任憑命運之擺佈。抱怨先天之宿命。豈真造物弄人。顛倒衆生。抑自作之孽。無以自解歟。世間萬有不齊。得失、榮枯、壽夭、貧富。原難盡如人意。然而一功福田。不離方寸。果能自求在我。則天賦良貴。聖凡何殊。且同一時機。而成者自成。敗者自敗。同一處境。而樂者自樂。苦者自苦。且心向慈航。而足陷苦海。身入寶山。而空手無獲。其實一切境界。都由心生。裁者自培。傾者自覆。

終歸自招自取。何能諉諸氣數與命運乎。

72 所貴于修者。立德積善。自立于命。克己從仁。永無怨尤。是知修之真詣。在內不在外。在隱不在顯。在己不在天。必手不親不聞之處。無愧于吾心。乃于可親可聞之間。不愧于人群。充願力。重實踐。處處盡心。時時感通。若必于心外求其所謂上帝。則天人兩分。終難合一。是知心即道。人即神。天人妙合。無感不通。最怕向善而不知樂善。避惡而不免怙惡。慕乎仁。常不能充其量。寡于過。常不能清其源。乃至未宏其善而貪其名。未踐其實而飾其非。此不可不隨時體察而警惕者也。

73 院會標明慈旨。與大道並爲體用。至于力有厚薄。勢有難易。固不能勉強從事。最怕計較得失。牽連座俗。力小者既難宏善。力大者尤多顧慮。以致初志向好。轉念即衰。其實果具真心。原無遏阻。力小並非毫無可能。力大則功德自易隨心。試思人生不遭意外。施捨所費幾何。節省可能之資力。輪助同善之慈功。亦何樂而不爲。若專爲自私。集聚濁財。則不仁勢所轄免。並以造因種孽爲得計。是不足與言慈旨矣。處此時會。凡能約己力善者。殊屬可貴。若在身家享受之外。不肯善用有餘之資力。未免可惜。在己非所必需。在數不可必保。僅以子孫爲債權。未必是福。若肯行時時方便。作

種種陰功。自有免劫化數之潛力在焉。細心體察。劫數所在。無非總結之關。已現者人事所知。未現者尚難盡悉。若以人心私妄可計度逃避。則不足爲劫數矣。但似明猶迷之徒。難知行道有福。爲善最樂。輒因某種阻礙。不能勤破並放開。何能培養元氣。立德以消災乎。五經明示。己不佑人者。天何佑乎己。己不渡人者。天何渡乎己。渡人者卽渡己也。佑人者亦佑己也。

74 太上老君有言曰。今天下之人。皆惑于是非。昏于利害。同疾者多。固莫有覺者。蓋君子畏理甚于畏法。菩薩畏因甚于畏果。根本之地。稍有自歧。毫釐千里。得喪之差。不可以道里計也。易爲君子謀。趨吉避凶。吉凶可以趨避。固有自修之道存焉。捨道修而言趨避。是凡夫計較利害。計之愈巧。失之亦愈甚。是如一念一行。足以障礙畢生。而一人一事。足以影響於團體事業。推究其故。仍在純誠與善德若何耳。且天理良知與自然律。同出一轍。順此則昌。違此則亡。益人者結果人我兩益。害人者終必人我兩害。故善惡之定義。盡人可以自知。但沉迷者。仍不肯及時遵道而行。順理而修。迨至後天之私識雜慮。統歸無用。而後始悔心力之妄耗。蓋已晚矣。雖人心機巧。瞬息萬變。但所有衆生。若干種心。如來悉知悉見。豈神明所燭。不諳人情世態之多妄。趨

避計較之多慮耶。

75 古人居安思危。必保合太和。今人處於末世。而多自昧自蔽。縱知憂懼。不思解脫。此達者之所憫。聖佛之所悲也。雖然修持之功。驟難純圓。而濟人利物。原非勉強。日行一善。善善相繼。久則善性大圓。坦然無阻。舉凡起念、發心、出言、行事。但能有益於他。卽人我兩益。有益之言行。有益之感通。做則勝於不做。多做勝於少做。真做勝於偽做。凡我之可能。機之所許。勿自暴自棄。勿失機先緣。此爲解脫、弭化、之最捷最要者也。存乎其人。神而明之。本來如是。自當如是。若以私見塵識。視濟人利物爲愚人傻事。是又爲聰明而糊塗之流也。有心人悟此自勵。今日可爲。勿待明日。此時可爲。勿俟時後耳。

76 上帝在人人心裡。能不昧心中之上帝。則眞宰恒存。是卽眞理。是卽道路。人生不幸不聞道。聞道而不修。是幸猶不幸也。戒愼恐懼所以勵修。寡過遷善所以養德。不僅轉禍爲福。並可隨緣成化。總言興亡禍福之機。不外善不善而已。個人如是。家庭如是。社會國家亦莫不如是。

77 宇宙有無。不離虛實。塵俗苦樂。豈外因果。惟是實滿不還。虛極自復。道修關鍵。身

心主宰。胥在乎此。故善因得宏。世界轉移。瓜豆之喻。只言其顯然。而未論及因果化解與轉移也。蓋有無虛實之中。自然天秤。絲毫不爽。因果轉移之際。乘除化解。亦當然之可能。所以修人真能接受神聖之賜福加壽。必恪遵神事之愛意。實行當機之功。而心身主宰。化解挽救。消弭圓通。由內達外。推己及人。自得乎整體之適與心性自慰也。金錢爲身外之物。當爲我有時。應儘量使爲利人之用。毋作守財之俗人。況盈虛消長。朝擁千萬貫。而暮無分文者。在此劫潮起伏之際。比比皆是。此皆不能自覺自悟自得也。錢之爲物。能利用則明去而暗來。若吝而把持之。則必釀成巨禍。過去事例。不一而足。何不乘時作利世利人之舉耶。

78 自古真人。普通人均以爲得道仙佛之尊稱。其實並非如此之狹義也。所謂真人者與普通人有異色。普通人均稱己爲人。然而其所行所爲。並未盡其爲人之道。是人也。雖立身於人群之中。仍未能盡其爲人之道。未能徵其足以稱人也。必也其人在世。一切均以利世利人爲本。無論其內修外行。均足爲人之表率。對於五倫八德。莫不極盡其道。是人也。乃可譽之曰真人。

79 自古神道設教。乃所以補足法律者。法律有時可窮。而道化之力。無論有形無形。均

足感化人心。發揮其潛移默化之力。而移風易俗。不過提倡神道者。切勿重神。當重其道。偏重於神者。心存邀福。乃屬迷信。蓋神本聰明正直。不能福人禍人。禍福乃人之自召耳。神則推行其道。教人爲善。教人守法。而又重在以五倫八德化人。冀芸芸衆生。共被大化。爲完善之人。因人既能完善。則社會當充滿和善之氣。無奸盜邪淫。無強取豪奪。無搜刮剝削。無弱肉強食。社會彬彬有序。時代承平。無亂臣賊子。無叛國殃民等事。而成無爲之治矣。道化之力。豈不大哉。若偏重在敬神拜神。而不遵行神靈教化之道。世之指爲迷信者。皆此等之流也。

80 世人不明真道。惟塵是迷。捨本逐末。以假爲真。久假不歸。大本已失。雖有智慧才力。不僅無補於世。亦無救於己。量其所圖。充其所欲。不外造因而已。及其至也。積因成果。積過成惡。孽障所縛。昧輪阻止。不得解脫。終歸墮落。蓋自靈失主宰。萬魔相乘。不惟競爭貪着爲無益。卽頂禮膜拜亦至愚耳。善悟此理。則神道曷修。雖千言萬語。所重者。仍在純功實候。足爲昌道推化之基也。有形道基。固在院會。無形道基。惟存一心。故有志於化渡者。必端行止以樹德範。盡心力以奠功果。又必藹然可親。言出由衷。以宏宣化之麻也。

81 修功真候。平時似無所覺。遇事考驗。則不平之念。不定之心。隨之而起。真知灼見不足歟。氣質之偏未除歟。抑功候弗純。矜躁偏急之爲害乎。實則習性久蔽。塵識又成第二性天。此害已誤人者。反不知其咎之安在也。最好良法。容爲量。恕爲功。持之久其效自宏。能看空小我假相。不因他人對我之重輕。而隨之有喜怒之念。只求我不自愧。外來之軒輊。何關於我之本真。例如一身前窮而後通。他人之前倨而後恭。豈真敬我毀我哉。看透世態。不值一笑。自當以容德空夫一切。此自養之要也。至於人已接觸。性情磨擦。本所難免。能以責人之見責己。以恕己之心恕人。則心靈性光。必別饒佳趣。是恕道爲修功之首要者也。至云己所不欲。勿施於人。我所求於他者。必先自問已否先施於人也。修者能卽此實驗。容與恕之工夫。海濶天空。魚躍鸞飛。皆自得之樂也。

82 資秉有不同。悟境亦各殊。本難同日而語。神事因人施教。隨緣導覺。深淺高下。初無一定之說法。只求啓人之慧悟。默感其心而已。夫禾也生螯。而敗禾者螯。水也生蚘。而腐水者蚘。故慾發於心。而害心者。慾也。君子自持自勉。千言萬語。人身處塵了塵。千頭萬緒。無論言之若何。事之若何。其約於身而證於修者。不外治心而已。心兮

本虛。應物無迹。操之如是。捨之如彼。然本體空虛寂靜。仍如故也。物來順應。物去復空。迹象不留。本真常用。身處塵世。以應萬變。感而遂通。虛而不滯也。惟實修之法。不外兩端。一則勤除蒙蔽。漸復本明。一則充其本良。自掃障阻。二者用力有難易。收效有遲速。要皆因其悟境。藉其資秉。各致其修也。所謂道高道下。道淺道深。非道有淺深高下。乃因修者。自高自下。自淺自深。故見智見仁。存乎其人耳。

83 積善餘慶。積厚流光。是積字最易了解。凡百事功。倖致者不足恃。必積漸而來。積漸而成。所謂腳踏實地。步步邁進。終臻極境也。善不積不足以成名。惡不積不足以滅身。故曰、無憤憤之志者。無昭昭之明。無綿綿之事者。無赫赫之功。蓋學不積不通。藝不積不精。德不積不厚。功不積不崇。聖佛賢哲。卓然超群。功被後世。何一非善積而來歟。修人明此積字淺意。詳檢於平時修行。則一時刻。一言一動。皆應本修旨。自篤修力。善積可已。至于積久功深。性圓靈明。其慧玄自通。當不待勉強。自可從容中道矣。但積字必與推字相配合。然後內功外行。方不致偏于一隅也。推字之意。更屬明顯。老老幼幼。舉斯心加諸彼。即善推而已。是故澹以守己。則曰認真推分。急于救人。則曰解衣推食。推誠相見者。不外推心置腹。推慈撫育者。自肯推燥就濕。是積

之在我。推之于人。世間萬事。不外此心。孟子謂推恩足以保四海。不推恩無以保妻子。古人所以大過人者。只在善推其所爲而已矣。

84 推愛子之心以愛姪。推愛女之心以愛娘。則人倫永無乖戾之氣。家庭常博自慰之境。卽此類推。不尤淺明乎。惟在肯否善推耳。推而不積。不足充其量。積而不推。不足成其真。是積是推。卽推卽積。道慈無邊德業。性天無限化育。皆得證于身心之中也。修人悟此。而證於此。如是所修所得。不落空談已。讀好書。說好話。行好事。有財盡財。無財盡力。無力盡心。何處非積。何處非推乎。實修者得一字一言。可以明究竟而造上乘。當非處語也。

85 世人喜健而厭病。戀生而惡死。本屬人之常情。一肢有病。舉體不安。况臟腑更重之症乎。願解其苦。先明其因。其積也漸。其發也突。積慾成損。積損成衰。身非金石。內外交攻。得保天年者蓋寡。健壯之時。戕賊日久。衰老之後。希求延年。而澄治未徹其源。虧損未補其實。修持之功未純。積習之非未蠲。向道而未契其真。慕仁而未宏其德。歲月荏苒。殂謝期近。悔恨莫補。怨咎神明。祇囿於吉凶禍福之淺見。仍未猛覺徹悟耳。蓋進修研道者多。踐願全真者少。或未及時盡分。而獲益尙淺。或因業累牽纏。

而反多魔障。是以同一爲善。而報未必皆善。同樣爲惡。而報未必盡惡。然此生多災多難。並非因篤道勵修所致。此則可斷言者。應知天不負人。而人則多負於天。道不誤人。而人則每誤於道。所有盛與衰。安與危。盈與虛。成與缺。果思保泰持盈。或彌補增進。還須持至誠。明至道。體至仁。全至性。福慧雙修。而根源充固。內外兼濟。而形神俱超。更以無緣之慈。陰鷲之行。爲惠衆造命轉移運數之主樞。莫之爲而爲者。乃能莫之致而致也。

86 欲救末世。應從修始。欲修此身。應從心始。一心自主。萬行所基。萬由一始。末由本始。顯由微始。果由因始。既無無因之果。亦無無果之因。一切因果。不外方寸。有此則有彼。此生則彼生。無此則無彼。此滅則彼滅。一念之差。千里之謬。慎於初也易。挽於終也難。故善言始者。必會其終。善言近者。必知其遠。探本求始。就因位言之。靈昧分界。人禽幾希。克其罔念。卽爲作聖之始。放下屠刀。卽爲成佛之始。慎之於因。辨之於微。不昧此心。明之始也。篤己之誠。修之始也。踐吾之願。功之始也。善推所爲。行之始也。雖根慧境遇。功候造詣。人名不齊。惟秉其天性之善。宏其仁愛之德。全其爲人之理。同證道慈救渡之眞功實果。則無不同也。

87 諸惡莫作。衆善奉行。三歲孩童也曉得。八十老翁行不得。可見莫作與奉行。本非易事。彼高談玄理。而實行不至。坐破蒲團。而氣質不化。究竟何益於身心。詎知庸德之行。庸言之謹。尋常之篤實踐履處。乃見本來之真我歟。擴內在之天堂。造人間之淨土。皆根於真我之自覺。故聖哲之大過人處。不在其豐功偉績。而在其盡性踐形也。若僅具善心善力。而對善言善行。不能充量發揮。仍不免喪失當前之造福機緣也。

88 道修實際。惟守與爲。守所必守。爲所當爲。世人只見不當爲而爲者之顯然罪惡。而不知當爲不爲者。自誤誤世之無形愆惡也。蓋分所當爲。力所能爲。時會因緣尚許有爲。亦何樂而不爲。一行能充善氣。畢生欣愉。一念若阻仁機。自遏真源。彼以浮名私利之迷惑。塵識物慾之染着。以致放棄善行。終至欲爲而不得。徒遺心靈之追悔者耳。凡孝悌忠信。禮義廉恥。慈悲善緣。應守而不守。當爲而不爲者。我視之以爲何如。我之視人。猶人之視我。以人視人。固有同感。以神視人。更深悲憫也。

89 修人用功。應以省察自己功過爲先。無論忙閒動靜。隨時內叩。隨事返照。喜來時一檢點。怒來時一檢點。矜起時一覺察。躁發時一覺察。可以省却多少煩惱。化解多少痛苦。免去多少過失。促進多少功德。覺照無遮。受用無窮。推此而悟。凡塵境之得失

恩怨。原是本來所無。人生品德福分。與實際成就之大小。只視其心靈之明昧而已。90 道慈有定義。信仰立根。修行爲實功。誠恒是主。非若末世之私爭私逐。相率爲僞。一切權術詭巧。謾一時而不能謾於時時。愚一人而不能愚及人人。欺一事而不能欺之。事事。凡自恃過度聰明。畢竟最不聰明。只深其業障而已。故道之修也不難。而難於誠力之持久。一時之信。一念之誠。若無以繼之。卽一般事業與技藝。尙難竟全功而收成果。遑論修渡功行歟。況信而弗明者流於迷。誠而無恒者多自廢。更有疑信參半。誠僞不分者。豈知閑邪去妄。所以存其誠。滌私進德。所以立其信。研道勵修。總勝於浮生之虛度。明慈篤行。當優於無益之損耗。倘苟且自欺。言行僅成裝飾。虛僞待人。親疏自形隔離。世間聰明才智之士。其遇合成就。多不如淳樸敦厚者之可大可久。只因基本之誠信有差耳。

91 天下事豈能盡如人意。歷末劫應得處世之道。多慾難遂。妄念自擾。好勝必敗。務名多毀。毀譽榮辱。終須放下。轉瞬皆空。百年刹那。世人之嫌怨惱恨。每因不容不化。結而不解。以致加重苦果。或釀成實禍者。何可勝計。先哲之犯而不校。觸而不怒。以責人之心責己。以恕己之心恕人。對不如意之境。不如意之事。或拂意之聚合。寬容

含忍。過而不留。自然霧散雲消。氣開冰釋。此由無限真樂。有非凡庸所能領略者。且兩讓無不通之路。兩怨無不解之結。兩悔無不釋之怨。兩化無不消之禍。心平氣和。徹底勘破。何有恩怨是非擾我心境耶。最怕意氣用事。變本加厲。此衆生之苦業。所以相循而無已也。

92 感應篇云。所謂善人。人皆敬之。天道佑之。福祿隨之。衆邪遠之。神靈衛之。又曰。心起於善。善雖未爲。而吉神已隨之。須知感應之理。氣機所通。善以引善。清以引清。有不期然而然者。雖果報遲速有不同。而終無毫髮爽者。誰主之。誰使之。惟人自召耳。凡修功純者。德基厚者。存心正者。善念充者。隨時皆有護法之呵佑。故存誠無欺。吉神常在。若邪念一萌。魄魔即乘之。一念轉移之間。感召捷於桴鼓。故善修者必慎其獨也。生命中最大轉關之點。在於決心改悔。徹底自新。福雖未至。而禍已遠矣。93 若論克治身心之實功。莫要於知過而悔過。改過以求寡過也。知過在不自昧。悔過乃能自新。改過卽是遷善。寡過進而無過。但驟言知過。却非易事。顯然之身過易忽。昧然之心過難察。警思箴曰。知非知過。古有幾人。孔子曰。吾未見能見其過而內自訟者。呂東萊云。人能從克己做工夫。方知自朝至暮。自頂至踵。無非過失。故曰。聖人

過多。賢人過少。愚人無過。聖賢非必失諸言行。而覺照惕勵。戒慎乎獨知之處。不因自恕。安於自是。其自視無過者。乃愚夫耳。人生之大患。在不知其過。更不幸不聞其過。常人通病。只是不肯認錯責己。若云人非聖賢。誰能無過。欺言也。意在寬容他人。不可用以恕己。況過者聖賢所不免。然而無礙其爲聖賢者。因其能悔改也。

94 人類之所貴是生命。生命之至寶是神氣。形體之安泰。依乎神氣之充固。神與氣會。氣與神合。則心定而形全。倘徒求養形。而昧却本真。則貪妄不與嗜慾期而嗜慾萌。耗損不與疾病期而疾病生。戕賊不與死亡期而死亡至。縱有物質之維護。難補勞傷之過度。所謂絕躁怒以養肝氣。息妄念以養心氣。節飲食以養胃氣。謹言語以養肺氣。淡情慾以養腎氣。進而不因識神亂元神。不以客氣傷元氣。皆包括精神形體而兼所養也。故樂善所以養心。集義所以養氣。主敬所以養神。存誠所以養性。宏仁以養兩間萬有。昌道以養天下萬世。是知道修所貴於充養者。應以存誠主敬。集義樂善。爲真修之實功也。

95 末世風氣。塵俗淺見。多視修道行慈爲傻事。忠誠老實爲傻人。對於守分安命不貪不苟者。忠恕待人不怨不尤者。正直坦爽胸無城府者。認錯克己容忍吃虧者。篤實認真

捨己奉公者。同情助人好善若渴者。看來都是傻氣十足。不够聰明。但是既笑他傻得不顧利害。而內心未嘗不喜歡這些傻子。只是自己不肯如是而已。試問這樣若算是傻。將從何處發現真實的人呢。過去的聖賢哲人義士。豈不都是傻嗎。

96誠意爲自修之首要。卽正心之實功。心本無心。意動而有心。所謂無善無惡心之體。有善有惡意之動。能於幽獨之中。隱微之處。推本無欺之誠意。不自恕。不自昧。不自苟。不自餒。盡人合天。俯仰無愧。人能對自己誠實。卽對天良負責。不欺天。由於不欺心。不欺人。由於不自欺。對本身之是非功過。與品德言行。及優點或缺點。能以嚴謹正視自己。糾察自己。認清自己。得到自我了解。推而自我擴充。故曰反身而誠。樂莫大焉。若缺乏自我誠實。始則自恕。繼而自欺。以至自誤而自毀。舉凡情緒之紛擾。精神之錯亂。心理之失常。多半導因於自欺之意念。而不知自省自反。因而遮掩推諉。炫長護短。文過飾非。以非爲是。愈形其虛僞。加深其罪過。非徒無益。貽害無窮。故罪莫大於自欺。而害莫甚於昧心也。

97世間善男信心。所以虔奉觀世音菩薩。因其宏願誓度衆生。具不可思議之妙德。尋聲救苦。而苦惱衆生。一心稱名。菩薩卽時觀其音聲。皆得解脫。故觀世音之廣大靈感。

盡人皆知。歷代記載者。不勝枚舉。但世間衆生無量。末劫災禍頻興。觀世音僅只一位。何能同時隨人施救。普遍無遺乎。昔賢答此。以水月鏡天爲喻。凡有水有鏡之處。卽普現月影天光。而碧空皓月。原是一也。所謂千江有水千江月。萬里無雲萬里天。只怕水濁鏡昏。不能接受照臨。縱然月朗中天。亦不得映發顯現耳。諸佛菩薩。救度有情。隨緣顯化。妙應無窮。但善念未眞。心不至誠者。及平日私爭私逐。心地邪惡不正者。每因一時未獲解救。輒疑佛菩薩之不我應。殊不知衆生以善根善行而通誠格。了因脫厄而得救度者。何止恒河沙數。且當末劫災禍苦難中。人事無可用其力。而得救於觀音之護佑者。實由衆生心中之觀世音救度之也。明乎性本佛性。貴在心同佛心。亦卽人人本具之性德。本覺之眞心。良知昭然。天理純然。至誠不息。感而遂通。故一覺卽悟。乃至永覺弗迷。所謂度不自度。度自吾心。諸惡莫作。衆善奉行。全憑此心也。若在己未肯慈悲。徒希求解脫苦難。天地間有是感應之理乎。

98 實修工夫。簡而易行。莫不從日用尋常中。修持涵養而來。須知不正卽邪。不邪卽正。不善卽惡。不惡卽善。不覺卽迷。不迷卽覺。不眞卽妄。不妄卽眞。彼來則此退。此有則彼無。正邪善惡覺迷眞妄之別。原無中間可容跼住脚步。若以不好不壞自居。或認

爲心好。不須再修。是皆苟且偷生之習氣。使之因循自誤耳。果真徹底反省。隨時檢點。則身口意三業。及有形無形之過失。將擢髮難數。祇是各有輕重隱顯之不同而已。故純修者。由根本認清眞妄。懷操存捨亡之誠。嚴獨勘獨知之眞。一動即覺。一覺即轉。可以轉過惡而修福德。可以轉煩惱而依菩提。以至轉識成智。轉凡爲聖。全存眞心之淨明光覺。當體立徹也。

99 世人多抱希福之望。而忽視致福之道。縱有前生積累而來之福命。如只顧享福。不知惜福。又不種福。難免福盡苦來。其尤甚者。殉利背義。死守財物。慳吝成習。貪憚無厭。佛家謂種此慳貪不施之因。必受餓鬼之報。彼任意揮霍者。終至澤絕福亦消。噬臍莫追。而貪得求盈者。不知多藏必厚亡。滿則招損耳。原夫天命之性。賦之於人。性德所備。本善同具。循性而行。何往悲善。從天性源頭。達至善境界。克盡性分。即是福分之增進。培養元氣。即是福氣之綿長。大抵末劫衆生。未肯修德積福者。皆因塵識混淆。習俗薰染。汨之以私。蔽之以欲。力可行善而弗肯爲。勢可造福而拒絕之。似有無形之孽惑業力。阻止其崇德作善。既失其本應自主之修。難成可由自全之果。徒爲物質生活。過分貪戀。擾亂精神主體。以至昧失德性。如此人生。豈有眞正幸福可

言歟。雖有時性真顯露。天理乍現。而轉念又爲無明所蔽。迷掩虛靈之光。終不免墮於昧輪之苦障耳。總之、立命在自修。一切從心造。心生一切善。善生一切福。故曰自求多福。在我而已。

100 所謂仁義禮智。良知良能。本爲生來所固有。孝弟忠信。庸言庸行。原屬做人之本分。由平易庸常之道。而踐履篤實。以自新其德。全靠省察克治工夫之無欺。此立身修己之根本主體。切要基點所在也。一是皆是。一非皆非。北處不容稍有夾雜。無論善意惡念。正覺邪思。以及誠僞真妄。理欲義利。總不可欺瞞自己。嚴守此處之分界綫。何至於認欲作理。因利害義。而誠僞不分。真妄莫辨耶。常人意念之發。有害有不善。人雖不知。而已獨知。修人應就此處着力。如一念發在好善。卽誠誠懇懇去好善。一念發在惡惡。卽切切實實去惡惡。蓋善本當行。非爲邀福。惡本不當行。非爲免禍。由本心之良知。充虛中之真意。是謂純誠之真修也。至於明知是善。而不肯篤實力行。明知是惡。而未能果決拒絕。是乃爲情慾所牽。塵識所惑。蔽於私意。以致失其真宰耳。

附錄程子四箴。曾子五箴。

程子四箴（程子乃宋洛陽人。名頤。字正叔。世稱伊川先生。）

視箴

心兮本虛。應物無迹。操之有要。視爲之則。蔽交於前。其中則遷。制之於外。以安其內。克己復禮。久而誠矣。

聽箴

人有秉彝。本乎天性。知誘物化。遂亡其正。卓彼先覺。知止有定。閑邪存誠。非禮勿聽。

言箴

人心之動。因言以宣。發禁躁妄。內斯靜專。矧是樞機。興戎出好。吉凶榮辱。惟其所召。傷易則誕。傷煩則支。己肆物忤。出悖來違。非法不道。欽哉訓辭。

動箴

哲人知幾。誠之於思。志士勵行。守之於爲。順理則裕。從欲惟危。造次克念。戰兢自持。習與性成。聖賢同歸。

曾子五箴并序（曾子乃清湖南湘鄉人。名國藩。字伯涵。號滌生。諡文正。世稱曾文正公。）

少不自立。荏苒遂洎今茲。蓋古人學成之年。而吾碌碌尙如斯也。不其戚矣。繼是以往。人事日紛。德慧日損。下流之赴。抑又可知。夫疾疾所以益智。逸豫所以亡身。僕以中材。而履安順。將欲刻苦而自振拔。諒哉。其難之與。作五箴以自創云。

立志箴

煌煌先哲。彼不猶人。藐焉小子。亦父母之身。聰明福祿。予吾者厚哉。棄天而佚。是及凶災。積悔累千。其終也已。往者不可追。請從今始。荷道以躬。與之以言。一息尙活。永矢弗諼。

居敬箴

天地定位。二五胚胎。鼎焉作配。實曰三才。儼恪齋明。以凝汝命。汝之不莊。伐生戕性。誰人可慢。何事可弛。弛事者無成。慢人者反爾。縱彼不反。亦長吾驕。人則下汝。天罰昭昭。

主靜箴

齋宿日觀。天鷄一鳴。萬籟俱息。但聞鐘聲。後有毒蛇。前有猛虎。神定不懼。誰敢余侮。豈伊避人。日對三軍。我慮則一。彼紛不紛。馳騫半生。曾不自主。今其老矣。殆擾擾以終古。

謹言箴

巧語悅人。自擾其身。閒善送日。亦擾汝神。解人不誇。誇者不解。道聽塗說。智笑愚駭。駭者終明。謂汝實欺。笑者鄙汝。雖矢猶疑。尤悔既叢。銘以自攻。銘而復蹈。嗟汝既耄。

有恒箴

自吾識字。百歷泊茲。二十有八載。則無一知。曩之所忻。閱時而鄙。故者既拋。新者旋徙。德業之不常。日爲物牽。爾之再食。曾未聞或愆。黍黍之增。久乃盈斗。天君司命。敢告馬走。

一九七二年三月初版

二〇〇一年七月翻譯初版

---

# 歡 迎 翻 印

---

編輯者：王 瀾 觀

校訂者：張 圓 瑟

翻譯者：根 本 宏

發行者：陳 福 坡

日本紅卍字會横浜分会  
横浜市中央区山下町二二一八  
電話 八二四五五六四一六八八

